

筑波大学第三学群国際総合学類
卒業論文

カナダ・ヌナブト準州における
イヌイトの自己アイデンティティと言語

2005年1月

氏名：中本千絵
学籍番号：200001129
指導教官：関根久雄

目次

序章.....	1
1. 問題意識・問題設定.....	1
2. 言語定義.....	2
(1)イヌイト (inuit)	2
(2)イヌイト語.....	2
(3)自己アイデンティティ.....	3
3. 研究方法.....	5
第1章 マイノリティ社会の自己アイデンティティとその言語.....	6
1. マイノリティ社会における言語の役割.....	6
2. マイノリティ言語とアイデンティティ.....	7
第2章 イヌイト社会の変遷.....	9
1. 伝統的社会生活の時代.....	9
(1)欧米社会と接触する以前からの生活.....	9
(2)欧米社会との接触.....	11
2. 同化政策の時代.....	12
(1)定住化.....	13
(2)伝統的アイデンティティの変化.....	14
3. 多文化主義の時代.....	16
(1)多文化主義への政策転換.....	16
(2)さらなる民族自主決定権を求めて.....	17
(3)ヌナブト準州誕生(1999年)から現在まで.....	19
4. まとめ.....	20
第3章 言語活動の諸事例.....	22
1. 言語使用例.....	22
(1)事例1：ペリーベイ村の言語使用例.....	22
(2)事例2：バフィン島の言語使用例.....	25
2. 世代カテゴリー.....	31

(1)イヌイット語のみを使用する老人世代.....	31
(2)イヌイット語と英語のバイリンガル①：中年世代.....	32
(3)イヌイット語と英語のバイリンガル②：若者世代.....	33
3. 言語活動が変化した諸要因.....	35
(1)同化政策による定住化と学校教育.....	35
(2) テレビ・ビデオの普及と欧米文化の浸透.....	37
4. 多文化主義国家カナダ.....	38
5. まとめ.....	38
第4章 ヌナブト準州・イヌイットの自己アイデンティティ.....	40
1. アイデンティティ形成要因の抽出.....	40
(1)政治活動.....	40
(2)経済活動.....	42
(3)倫理観・世界観.....	43
2. 国民的アイデンティティの保持.....	44
3. まとめ.....	45
終章 イヌイットである意義とは.....	46
謝辞.....	49
注.....	50
参考文献.....	52
英文サマリー.....	56

表目次

表1 直説法の語尾使用例.....	24
表2 原因の関係性（主に「～ので」を表す）の語尾使用例.....	24

序章

1. 問題意識・問題設定

イヌイト (Inuit) は、今から 4000~6000 年前ころにアメリカ大陸で生活基盤を築いた人々と考えられ、現在も北緯 60 度以北のツンドラ地帯を中心に 4 万 9,000 人あまりが居住するカナダの少数民族である⁽¹⁾。イヌイト社会は、1950 年代以降、連邦政府による管轄下に実質的に入る形で、欧米的価値観に基づく同化政策が進められた結果、急激な社会的・経済的・文化的変化を経験した。また、伝統的な社会生活から、全く異なる価値観に基づく社会に組み込まれるという急速な変化に適応できず、慢性的な貧困、アルコール中毒、高い自殺率などの社会問題が起こった。これらの問題は、カナダの他地域にくらべ、はるかに深刻である。

他方で、1970 年代からカナダにみられた多文化主義の流れにより、連邦政府は、先住民に対しても文化的な差異をより柔軟に認める政策転換を行うこととなった。自治権請求の運動がイヌイト側でも徐々に高まりを見せていたことと相まって、1999 年 4 月 1 日、当時の北西準州から独立する形でヌナブト準州(Nunavut Territory)が誕生した。準州内ではイヌイトが全人口の 85%を占め、公用語には、英語、フランス語の他、イヌイト独自の言語であるイヌクティウト (Inuktitut) とイヌインナクトゥン(Inuinnaqtun)が加えられるなど、イヌイト社会を意識した政策がとられている。

イヌイト社会をとりまく変化に伴い、イヌイト固有の文化、価値観、伝統が急激に外部の影響を受けている。筆者が 2003 年カナダ留学中に観たドキュメンタリー番組では、英語のみを使用するあるイヌイトの青年を紹介していた。その青年は自分がイヌイトであると認識しており、イヌイトの文化・伝統は守られていくべきであると語った。伝統的な言語を使えない彼が、それでも「イヌイトとして」の自分にこだわる背景には何があるのか。また、彼にとっての言語とはどのような意味を持つものなのだろうか。

本論文は、ヌナブト準州のイヌイトに焦点をあて、主に言語活動から捉えられる彼らの自己アイデンティティの形成要因を明らかにすることを目的とする。また、言語 (イヌイト語) がイヌイトの中でどのような位置を占めてきたのかを、連邦政府、ヌナブト準州の政策やイヌイト社会での事例を踏まえながら分析する。それら

を踏まえ、言語的側面から明らかになるイヌイットの自己アイデンティティが、ヌナブト準州のイヌイットに対しどのような意味を持つのかを考察する。

2. 言語定義

ここでは、本論文で使用する言葉で、一般的に様々な呼び方があり、誤解をまねくおそれのある言語をとりあげ、本論文における定義づけを行う。

(1) イヌイット (inuit)

一般に、ロシア、アラスカ、カナダ、グリーンランドの極北地帯の住民は「エスキモー」と呼ばれたが、最近はこれを蔑視的な表現であると考え、民族名称から避けられる傾向にある。しかし、それぞれの地域が4つの国に組み込まれているため、住民を総称する統一された呼び方は未だに存在しない。

そもそも、彼らがひとつの民族であるという見方自体が間違いであり、現在のカナダの国土にあたる地域だけでも、大まかにわけて9つのイヌイットグループがあったとされる。また極北地帯は、言語的にも、南西アラスカとシベリアのユピック (Yup'ik) 方言、北西アラスカから東のイヌイット/イヌピアック (Inuit-Inupiaq) 方言を使う2つの集団に分かれる[岸上 1998:12-14,19 ; スチュアート 1999:124-126, 2002:108-112]。

しかしながら本論文では、中部・東部極北地方にあたるヌナブト準州を事例に扱うことと、カナダ政府が民族名称として使用していることから、ヌナブト準州の先住民をイヌイット⁽²⁾という名称で表すことにする。またここでは、ヌナブト準州の住民として、イヌイット集団を1つの集団として捉える。さらに、シベリアからアラスカ極北圏の民を指す時はユピック、極北地帯の住民を総称する場合にはイヌイット/ユピック⁽³⁾という言葉を使う。

(2) イヌイット語

カナダ中部・東部極北圏のイヌイットが話す言語は、エスキモー・アリュート語族に属するイヌイット/イヌピアック方言である。その内に、中部北極圏で話されるイヌビアルトゥン (Inuvialuktun) とイヌインナクトゥン (Inuinnaqtun) の2大方言、東部極北圏のイヌクティトゥ (Inuktitut) などがある。ヌナブト準州で話されるこのイヌクティトゥにも6つの方言があり、それらにはさらに2つ以上の方言があるという[スチュアート 1999:124]。ヌナブトに限っては、違いはあるにせよ、方言同士あ

る程度までは通じる。また、ヌナブトのキティックミオット地域で話されるイヌインナックトゥンは、表記が異なる。イヌクティトゥットの表記にはシラビックス (Syllabics) が使われるのに対し、イヌインナックトゥンではアルファベットが使用される[宮岡 1987:208-209 ; スチュアート 1999:128]。

しかしながらこの2言語はヌナブト準州で公用語として認められているため、本論文では、ヌナブト準州で使用されるイヌクティトゥットとイヌインナックトゥンをイヌイット語として扱う。

(3)自己アイデンティティ

井上は、アイデンティティの意味を、「自分を何者として定義するか」ということに求める[井上 2002:222]。そしてそのアイデンティティは、「自己の外部に対して自己を表示する」あり方と「自己の内部で自己を方向付ける」あり方の2つがある。アイデンティティは、これら（他者に認識される自己と自己が認識する自己）を結びつけることで、確立される[井上 2002:222]。

またスチュアートは、「アイデンティティとは自と他、内と外を区別する境界（であり、）その境界は、当事者のおかれている自然・社会環境、関係性、そしてときに『血』という認識によって、いかようにも変化する」[スチュアート 2002:118]と述べる。そして彼は、アイデンティティを共有する最も大きな集団として、「民族⁽⁴⁾」を挙げる[スチュアート 2002:117]。

ここで、イヌイット社会における文化とアイデンティティを扱った先行研究をみると、歴史的な経緯から、政治・経済活動の視点から描かれたアイデンティティ研究が多い。原は、極北地域の人々の社会では、組織力を持った指導者が生まれる伝統がないことや組織の中で活動する習慣がないこと、闘争という概念や感覚がないことを挙げ、民族的アイデンティティのまとまりがないので、この地域における民族運動は盛り上がりにくいとする[原 1979:126]。しかしながらイヌイットは、1980～90年代、土地請求権と先住民自治の要求という2つを中心に民族運動を展開した。「イヌイット」として民族的アイデンティティを確立することで、自分たちの社会的権利を取り戻そうとしたのである[ミラー1993:250]。

その他に、スチュアートは、伝統的生業活動を通して、本来の生業活動が意味する意義よりも、政治的道具として語られる側面の強い現在の生業活動から、そこに見ら

れる民族的アイデンティティとの関係を説明する。

ここで重要なポイントは、生業活動という「伝統文化」を実際に行なうことではなくとも、いつでも行なえる立場にあるという選択肢があるかどうかである。つまり、気が向けば猟に出かけられるという建前が、イヌイトやエスキモーのアイデンティティを支えるものであることである。(中略) 実際に猟に出ないにしても、法によって猟を行なう権利が保障されていることと、猟を「伝統的」に行なってきた社会の一員であることから生じる一体感(アイデンティティ)が重要である[スチュアート 1996:146]。

ここからは、生存のためという生業活動の本来の意義が減少し、代わりに民族独自のアイデンティティを表象するものへとその比重を移す生業活動がみられる[スチュアート 1996:147]。さらにこれを受ける形で大村は、彫刻による現金収入によってそのような生業活動の低下や、食生活の変化をまねいたものの、「彫刻に対する芸術市場の好み」が逆投影した結果、生業の象徴化が生じ、(中略) 実質的な意味を失った生業活動の意味が象徴的に維持されてきた」[大村 1996:113]と指摘する。ここでは、「再生産」された文化を自分たちのものとして認識し、新たに自分達を表象するものとして受け入れる行為がなされる。

スチュアートと大村の指摘には、文化の「再生産」によって、自己アイデンティティの「再確立」が行われるという共通点が浮かび上がる。つまり、変化に応じてイヌイトは意識的・無意識的に新たな文化の側面を作り、それを抛りどころに自分たちの民族的アイデンティティを高めているのである。上記の政治活動においても、イヌイトは、従来存在しなかった組織や民族運動という文化概念を利用し、民族的アイデンティティを高めた。ここには、文化とアイデンティティとの間に強い相関関係がみられる。

以上より、今日のヌナブト準州イヌイトは、選択的に「イヌイトである」という意識を内部で共有し、外部へ表象することで、彼らの中で「ヌナブト準州イヌイト」という集団にたいする帰属意識を育て、民族的アイデンティティを形成してきたことがわかる。また、ヌナブト準州イヌイトの場合は、近代国家の枠組み内にあることで、国民的アイデンティティも形成した。さらにこれらのアイデンティティは、

文化の「再生産」との関係の中で、常に変化するものであると捉えられる。そこで、本論文では、「イヌイトである」という自己の内部に向けた帰属意識と、自己の外部に向けた自己表象を、ヌナブト準州のレベルで1つの集団と捉え、そこにある民族的・国民的アイデンティティを、イヌイトの自己アイデンティティとする。

3. 研究方法

本論文では、上記の問題設定、使用言語を踏まえ、以下のように論文を構成する。第1章では、マイノリティ社会における言語・文化の先行研究を扱い、本論文で言語を中心としたアイデンティティ研究を行うことの意義を明示する。第2章では、イヌイトが近代国家の枠組みに組み込まれていく過程で、どのような民族的対応をしてきたかを連邦政府の政策を軸に整理する。第3章では言語に注目し、言語活動の事例や第2章を踏まえて、イヌイト語がイヌイトの自己アイデンティティの中でどのような位置づけにあり、どのような性質を持つのかを明らかにする。

以上を踏まえて第4章では、ヌナブト社会における自己アイデンティティの形成要因を、言語を中心にすえた視点から抽出し、考察する。さらに終章においては、抽出された形成要因から導き出される言語の特性を軸に、彼らが「イヌイトである」意義をさぐりたい。

第1章 マイノリティ社会の自己アイデンティティとその言語

1. マイノリティ社会における言語の役割

本章では、近代国家におけるマイノリティ社会の自己アイデンティティとその言語との関係を分析した先行研究を用いて、本論文で言語を中心にアイデンティティ研究をする意義を示したい。

宮岡は、「言語も文化であり、言語には（狭義つまり非言語的）文化が『こめられている』」[宮岡 2002:28]と述べる。そしてこれは、「それじしんが文化の一つの要素でありながら、文化が巨細にわたっていわば凝縮され埋め込まれているのは言語を措いてない」[宮岡 2002:25]という根拠に基づく。ここから解釈すると、言語には人間の認識や思考に作用するはたらきがあり、これが文化と密接に結びついて存在するといえる。また宮岡は（非言語的）文化の方が環境変化に左右されやすいことを挙げ、「言語が消えゆく文化の諸側面のうち、最後まで残りやすい傾向をもつ」[宮岡 2002:29]ことも主張する。つまり、言語を失うことはそこに「こめられている」文化を失うことであり、「その意味では、言語は文化の最後の砦」[宮岡 2002:29]なのである。

宮岡はさらに、マイノリティ社会と危機言語の関わりを、言語のもつ直接的なはたらきから説明する。

危機言語の問題に直結する、いま一つの直接機能的なはたらきは、言語がみずからの集団を他者から差異化し群化するうえでもつ、とりわけ大きな力にある。集団の規模や性格がどうであっても（家族、学校仲間、同世代、秘密社会、などなど）、わずかな語彙を共有し使用するだけで相互の絆と親近感はずよまり、他者を容易に踏み込ませない心理的障壁がそこにつくられる。まして、現実と同じことばを話している、つまり一つの方言あるいは言語の体系全体を共有しているとなると、それは、言語に「こめられた」文化（中略）の集団的共有を意味する以上、そこにはたらく群化の力がつよくなるわけではない。言語がしばしば特定の集団への帰属を象徴する「バッチ」、集団的アイデンティティの中核となるのは、このためである [宮岡 2002:30]。

また、ワームは、マイノリティ民族が自分達の危機言語を学ぶ意義として、「みずからの伝統言語は民族的アイデンティティの主たる象徴であって、自分はほかにはない特別なコミュニティに属しているのだと話者自身に感じさせ、誇りをもたせるものである」[ワーム 2002:157]と説明する。さらに加藤は、「いかなる言語も、その大部分が文化的に特異なものであるから、言語が消滅すれば、伝統的な文化とアイデンティティの重要な一部も失われると感じる」[ネトル and ロメイン 2001:301]と、言語の文化的重要性を述べる。

これらから解釈すると、民族言語そのものは、民族的アイデンティティの象徴となる性質を持つので、それを保持することは、民族的アイデンティティを保ち続ける要因になるといえる。

2. マイノリティ言語とアイデンティティ

現実には、ひとつの社会に複数の言語集団がいる場合、マイノリティの言語集団はより大きな勢力を持つ言語集団に同化・吸収されるケースが多い。事実、現在のカナダにあたる地域では、少なくとも60の先住民族言語があるとされていたが、そのうち存続可能とされる言語は、4つのみである（オジブウェ語、クリー語、ダコタ語、イヌイット語）[ネトル and ロメイン 2001:11-12]。ネトルとロメインは、これらの4言語は、大規模な話者の基盤があり、子どもたちがその言語を獲得していて、生き残りを保障しているとする[*ibid.*:12]。しかしながら、マイノリティ言語の中では、言語学的に生き残る可能性があるとするイヌイット語と、イヌイット語を話せなくとも、自己を「イヌイットである」と主張する青年の存在には、大きな隔たりがある。

この現象と同じような例がネトルとロメインによって取り上げられている。アイルランド語を話さなくなってから何世紀もたつのに、「アイルランド人の3分の2は、アイルランド語がアイルランド人としてのアイデンティティを保持するために非常に重要だと信じている」[ネトル and ロメイン 2001:293]という。ここでは、アイルランドで、政府による言語教育が行われたが、家庭内における日常生活に用いられる努力がなされなかったため、世代間で伝達が行われなかったことが指摘される[ネトル and ロメイン 2001:291-293]。ネトルとロメインが焦点とするのは、マイノリティ言語であったアイルランド語が、なぜ生き残ることができなかったかという点であり、なぜ言語を失った現在においても、アイルランド人のアイデンティティが保持されているの

ストル/ロマンのみ

かについては触れられていない。

したがって、本章で扱ったマイノリティ社会の自己アイデンティティとその言語に関する先行研究では、なぜ言語を保持することが重要であるかという議論に焦点があり、なぜ民族の言語を失いつつも、民族的アイデンティティを保ち続けているのかという議論は行われていないことがわかる。そこで本論文では、この点に注目し、言語学的視点から論じられることが多いマイノリティ言語を、文化の「再生産」という人類学的視点から捉え、アイデンティティ研究を行うことで、新たな側面からイヌイト研究を行うことができると考え、本論文の意義付けとしたい。

第2章 イヌイット社会の変遷

1. 伝統的社会生活の時代

(1) 欧米社会と接触する以前からの生活

イヌイットの祖先がアジアから新大陸に渡った後、彼らは極北という特異な気候に適応する独自の社会を築いた。中部・東部極北地方に居住したイヌイットは、親族集団で季節ごとに移動しながらカリブーやアザラシ、ホッキョクイワナなどを狩猟し、生きるために、少ない資源を有効に利用できるだけ利用しなければならない環境にあった。そのため、イヌイットの文化ひとつひとつが、極北地帯で生きぬくための巧妙な手段となった。

1) 社会基盤

イヌイットの社会と経済活動における基盤は、拡大家族 (the extended family) であった。各社会は、婚姻関係によって構成された複数の世帯から成り、夏期には 25 名ほどからなる拡大家族集団が共同でホッキョクイワナ漁やカリブー猟を行った。冬期になると他のグループと共に 60~100 名規模の社会を形成し、集住した。そのような狩猟グループは冬期における社会では、冗談関係や配偶者交換を行うパートナー関係を他の拡大家族集団との間で結び、社会の統合を強めた。各社会のリーダーは、拡大家族の年長者のハンターが担っていたが、その影響力は集団内のみだったため、冬期の社会のような大きな集団では、全体を代表する政治リーダーはいなかった [Williamson 1974:31 ; 岸上 1998:19-20]。

また、各社会が孤立した環境にあったため、同じ集団内の人間関係は緊密であり、個人と集団の結びつきも強固であった。そして個人の世界は、社会的関係や地縁関係にある拡大家族集団内に限られていた。その他の集団との接触は極力避けられ、社会的つながりを持つことはなかった。そのため、集団ごとに独自の服装やスタイルなどの文化が生まれ、それぞれのテリトリーを築いた [バーチ 1991:51]。これらから、当時のイヌイットの自己アイデンティティは、所属する集団を基盤に確立されていたことがわかる。

2)世界観

カナダに住む他の先住民族にくらべ、他民族との交流が少なかったことにくわえ、極北を生き抜くための工夫が必要とされる中で、イヌイト独自の世界観が形成された。一般にイメージされる彼らの寛容さは、厳しい環境へ適応する過程で育まれたといえる。例えば、そりや家を作る木がなければ、アイボリーや石、雪で代用した。料理をする道具が手に入らなければ、生のまま肉を食べた。また人々は養子関係や配偶者交換関係などの様々なパートナー関係を結び、血縁関係以外の結びつきを作り、コミュニティ内の連帯を強めた。その他、日が短く太陽がほとんどあがらない冬期にお祭りや宴を頻繁に催し、それらを楽しむことで冬の生活を豊かにした。

このような寛容さは、欧米人によって楽天主で単純な民族だと考えられてきたが、バーチが指摘するように、現実異なる。イヌイトにとって、怒り、食欲、不平などの反社会的感情を表現することは恥ずかしいこととされており、複雑な感情を持っていても、それは遠まわしに表現された。これも、厳しい環境において、集団内の不必要な軋轢をさけるための手段であったという [Williamson 1974:33 ; バーチ 1991:175-177, 197-198]。

また、複雑な精神的コントロールも集団内で行われていた。生活にはりめぐらされた数々のタブーがその一例である。シャーマンは人々の生活全てに対して、意図的に影響を与えることができると信じられており、畏敬の対象であった。老人もその知識と経験の豊富さから、尊敬され大事にされた。また、一般に男性が圧倒的に力を持っている社会とイメージされるイヌイト社会であるが、家庭における女性の働きが不可欠であったので、女性も集団に対し影響力を持っていた。例えば、女性は、男性が持ち帰ったカリブーなどの皮を歯でなめし、極寒の地で凍死しないような丈夫な服を作る役割を担っていた。女性が機嫌をそこねて、家事を放棄することは、家族の生死にかかわることであったため、女性の地位も確保されたのである。その他に、反社会的な行動をとる者がいれば、集団全体でその者を嘲笑やのけ者扱いの対象にすることで、反省を促した。嘲笑やのけ者扱いは、個人が最も恐れる辱めであり、中には恥辱に耐えかね遠い別の親族集団へ移ることもあった。しかしこれは、当時のイヌイト個人にとって大変危険な状況であり、死をも覚悟することを意味していた [Williamson 1974:44-49]。

その他に、人々は、無数のタブーに対してお守りを身につけることによって対抗し

ようとした[パーチ 1991:152-157] 特に子どもは、成人するまで生存する確率が低かったため、親はカリブーやアザラシなどの皮や耳、歯など、80 以上のお守りを子どもの服に縫い付け、無事に成長し、良きハンターとなるよう願った[Rasmussen 1976:271-273]。

これらの側面からも、イヌイット社会がただ楽天的で、無頓着な社会ではなかったことがわかる。彼らは、厳しい極北地域で、タブーやシャーマンを基盤とする伝統宗教に沿い、互いに助け合い、また秩序を乱す場合は遠まわしに牽制しあって、狩猟採集生活を営む術を築いた。また、広大な土地での移動生活だったため、個人の世界はほぼ所属する拡大親族集団社会に限られた。そのような条件の中で、独自の世界観や方言を基盤に、イヌイットのアイデンティティは独立性を保ち、安定していた。

(2) 欧米社会との接触

18 世紀半ば頃までには、長い間外部社会との接触が限られていたイヌイット社会において欧米社会との接触が活発化していた。欧米人の目的は主に漁業、捕鯨と極北地域の探検であった。彼らによってイヌイットは銃や鉄製の道具、小麦粉などを入手するようになった。欧米人は同時に伝染病もイヌイット社会に持ちこんだため、肺結核、百日ぜき等により、20 世紀中ごろまでイヌイット社会の人口減少を引き起こした[スチュアート 1993:105 ; 岸上 1998:21]。また岸上は、この人口減少と病気の蔓延が「イヌイット社会の経済的基盤を弱体化させ、欧米社会への経済依存を招来する一つの要因」となり、イヌイット社会に打撃をあたえたと指摘する[岸上 1998:21]。

20 世紀初頭から捕鯨が衰退するとともに、ハドソン湾会社⁽⁵⁾を筆頭にいくつかの交易会社が東部極北地帯に進出した。1925 年にはこの地帯に数箇所の交易所が設けられ、本格的な交易が始まった[Patterson 1982:56 ; 岸上 1998:21]。時期に関しては地域によってかなり接触時期のばらつきがあるが、Crowe によると、ハドソン湾沿いのイヌイットにとって、1817 年には交易が日常的な習慣となっていたという[Crowe 1974:100]。当時交易を行っていたある船主は、アザラシ皮のコート 1 枚と鉄製ナイフ 1 本、木製日差しよけ 1 つと銃弾 1 つなどを取り引きしたと記録している[Crowe 1974:100]。

交易初期は毛皮の価格が高かったため、イヌイットは毛皮を目的とした狩猟を積極的に行った。またそれだけでなく、欧米人の通訳やガイド、お土産用の彫刻品作りなどにも従事したようである。こうして欧米人との接触が活発化するにともない、イヌ

イットの経済社会は、徐々に、そして確実に近代貨幣経済システムに巻き込まれていったといえる。

交易所における活動盛んになるにしたがい、キリスト教の宣教師も極北に進出するようになった。彼らは宣教師という役割のほかに、医師、歯科医、技術者、交易者、教師の役割も果たし、イヌイット社会に強い影響力を持った。キリスト教の普及についてシャーマンなどからの反発もあったが、結果的には彼らもまた他のイヌイットと同様にキリスト教の教えを彼らの伝統に取り入れ、彼らなりに解釈する方法で受け入れた。配偶者交換や嬰兒殺しの習慣等も宣教師によって改められた。また、イヌイット語を学ぶ宣教師や、イヌイット語の文字を作成し、聖書をイヌイット語に翻訳する等、イヌイット文化の保存に貢献をする宣教師もいた[Crowe 1974:146 ; Patterson 1982:65]。一方、連邦政府からの援助金で寄宿学校を建て、欧米的価値観のもと、イヌイットの師弟に教育をほどこす宣教師もあり、子どもたちの中には何年もの間親元に帰らず、彼らの言語や習慣から切り離されてしまった例もある[Crowe 1974:148-149]。このように従来の生活様式の変化にも関係した宣教師であったが、教会は、多くのイヌイット老人世代にとって彼らの伝統の一部となり、急激に変わりゆく世界の中で共有し、信頼できるものとなっていった[Crowe 1974:151]。これまで体験したことがなかったような変化が押し寄せる中で、教会が少なからずイヌイット側の立場に立って外部世界との媒介をしたことが、この結果につながったと考えられる。

このように、毛皮交易者や宣教師をはじめとする欧米人がイヌイット社会と彼らの精神世界にもたらした影響は大きく、イヌイットのアイデンティティを変化させる要因のひとつになったといえる。

2. 同化政策の時代

第2次世界大戦以降、それまで極北地帯ではパトロールを行う程度だったカナダ連邦政府が、同地域の資源や防衛に関心を寄せるようになり、地域住民の同化政策に乗り出した。その頃からイヌイットの社会生活は急激に様々な影響を受け始めた。同化政策は、欧米的価値観を非欧米的社会に導入する目的のもと、非欧米的価値観を完全否定するパターンリズム⁽⁶⁾であった。その結果、それまでの緩やかな社会変化とは異なり、イヌイット社会は急激に近代国家の中に組み込まれることとなる。

(1)定住化

社会変化に影響を与えた最大の要因は、定住化である。連邦政府は、広大な敷地で移動生活を行うイヌイットをカナダ国民として管轄するため、住居を提供し、医療や行政、福祉サービスを用意した村を作って、イヌイットの定住化を促した。これにより、交易商人や宣教師を媒介に緩やかに浸透していた近代的システムは、急激にイヌイット社会に浸透することとなった。定住化にともない、女性や子どもが村から離れることが少なくなり、男性も、生活拠点である村から狩猟・漁撈活動に出かける形態へと生活が変化した[岸上 1996:22]。

定住化の背景には、イヌイットの経済的困窮もあった。欧米人の要望に応える形で、ライフルなどの近代的な道具を使った狩猟でジャコウウシやカリブーなどを乱獲し、イヌイットは資源不足に直面していた。さらに、伝染病の蔓延による人口減少や、毛皮価格が下落したことにより、彼らの生活を保護すべきだという認識がカナダのマジョリティ社会⁽⁷⁾に高まった[Crowe 1974:171-176 ; 下村 2000:541]。その結果、もともと政府主導の定住化ではあったが、安全性や利便性、経済性から、イヌイット自ら定住の道を選ぶ者も少なくなかった[Patterson 1982:72 : Shearwood 2001:305]。岸上は、このことは一方でイヌイットがカナダ政府の保護下におかれたということであると指摘する[岸上 1996: 23]。さらにスチュアートによると、カナダ国民としての権利とともに、捕鯨の禁止や義務教育など様々な規制によって、3,000 キロメートル離れた「異民族」の政府に支配され、自らの政治的決定権を失ったことは、イヌイット社会に大きな影響を及ぼすようになった[スチュアート 1993: 106]。ここで問題となる点は、定住化に対して、イヌイットと政府の間に意識のずれがあったことである。組織に組み込まれるという習慣がなかったイヌイットにとっては、定住化にともなう規制など予想もしていないことだった。その結果、それまで思い向くまま自分達をコントロールしてきたイヌイットは、無意識のうちにマジョリティ社会へ組み込まれ、コントロールされる対象となってしまったのである。

定住化により従来の生活様式が変化すると、様々な社会問題が誘発された。まず人口が集中することで、村周辺の動物資源が減少した。その結果イヌイットの社会関係はいっそう複雑化し、家庭内暴力やアルコール依存症等の問題が発生した[岸上 1996:23, 1998:23]。政府によって、資源が枯渇した地域から北の地域へ移動させられた家族もあり、これまで集団ごとにある程度のテリトリーを持っていたイヌイットにと

って、違う集団と一緒にすることは受け入れにくく、軋轢をまねいた[Crowe 1974:187-188]。さらに、イヌイット文化を無視した形で英語による教育が行われたため、親と子の断絶がますます広がった。イヌイットを取り巻く環境も、1日24時間という欧米的時間軸のもと、賃金労働や持続可能な経済活動といった新しい価値観で占められるようになった[Shearwood 2001:300]。そのため、若者は欧米文化に傾倒し、極北で生きるための豊富な知識を持つことで敬意を集めていた老人たちが、その知恵を社会で活かす機会が減り、イヌイット文化を伝える機会も減少した。

(2)伝統的アイデンティティの変化

1)伝統的アイデンティティ

岸上は、1920年頃のイヌイットのアイデンティティレベルには、①人間であること、②名前を持つ個人、③拡大家族集団の成員、④コミュニティー（冬のキャンプ集団）、⑤同一方言を話す地域の成員があったとする[岸上 1998:220]。欧米社会との接触以前のイヌイット社会は、共通の方言を持つ人々以外は、他人であり、仲間意識を持つことがなかったのである。しかしながら、極北地域という特異性に対応するために培った社会基盤や世界観などには、共通点がみられる。例えば、拡大家族集団を基盤としたことや、狩猟採集を基盤とする移動生活によって生計を立てていた点、同一方言にアイデンティティを持っていた点などが挙げられる。よってここでは、欧米社会との接触以前に存在した社会基盤や世界観などによるイヌイットの価値観や帰属意識を伝統的アイデンティティと呼ぶ。また文字を持たなかったため、各方言がイヌイット同士のコミュニケーションの基盤となり、伝統的アイデンティティを支えていた。ここでは、英語との対比の上で、それらをまとめてイヌイット語とする。

2)欧米社会との接触当初

欧米社会との接触当初は、伝統的アイデンティティは保たれていた。新たな知識への好奇心から、イヌイット側が毛皮交易や欧米人のガイド、キリスト教への改宗など、近代社会の恩恵を受けようと試みた例もあり[Williamson 1974:185]、拡大家族集団、または個々のレベルにおいては相互的な接触が存在したと考えられる。さらに、欧米社会からもたらされた知識や道具そのものが、イヌイットの生活を飛躍的に改善したことは事実であり、彼らが伝統に基づいた生活を営んでいた間は、それらの近代的知識

は無防備に歓迎された。他方、外部との接触が増えるとともに、一部の若い世代を中心に、伝統的アイデンティティに変化が起こり始めた。その多くは、キリスト教の寄宿学校に行った子どもたちであった。寄宿学校では、欧米的価値観のもと、英語での教育が行われ、イヌイト語や従来の生活と切り離された子供たちが、親との断絶を起こした。さらに、この時期に欧米社会の貨幣経済や宗教と関わりを深めたことで、接触以前の生活に戻ることもできなくなった。

3)定住化以降

イヌイトの伝統的アイデンティティが、大きく影響されたのは、同化政策にともなう定住化以後であった。あまりにも価値観が違う大きな社会によって、自分達の社会全体が支配されることに対し、彼らはそれに対応する術を用意していなかったのである。特にイヌイト語が社会的影響範囲を狭めたことは、イヌイト語によって支えられてきた伝統的アイデンティティに大きな影響を及ぼした。第1に、社会に対する発言権を失ったことで、イヌイト語や従来の生活様式を否定的にとらえ、自分たちの文化に自信を失った点である。第2には、イヌイト語使用を含め、自分たち独自の生活様式を再び求める声が高まった点である[Williamson 1974:188]。

Croweによると、特に1950年から1970年にかけて学校教育を受けた若者が、文化の「狭間」に置かれ、苦しむことになったという[Crowe 1982:198]。彼らは、美容師やブルドーザーの運転技術などを修得したが、財産や時間など、生活面のすべてにおいて価値観の異なる世界で生計を立てるほどの知識や技術を持たなかったからである。加えて極北にはそのような知識を活かせる職場がほとんどなかった。また、親世代のように極北の地で暮らす技術を持っていなかったため、伝統生活にも戻ることができなかった。そのため若者は伝統技術を継承していないことを恥じると同時に、親や祖父母の世代を無知で時代遅れな存在とも捉え、ジレンマを抱えていた。Croweは、その結果、学校教育を受けた若者も含めイヌイトの大人達は、自分達のものではない法、言語、金銭、教育によって社会からの疎外感を味わったと指摘する[Crowe 1982:198-199]。このことから、自分を取り囲む異世界の中で、「安心感」を求めて、「理解できる」伝統生活を懐かしむ感情が引き金となり、過去（伝統）を取り戻そうとする声が高まり始めたとも考えられる。

他方で、この時期から、変化に適応しようとする動きも現れた。例えば Patterson に

よると、欧米人が社会に入り込んでくる前は、インディアンとイヌイットは互いに衝突するか、回避しあう関係にあった。しかし、欧米人が頂点に立つ社会関係の中では、イヌイットとインディアンはマイノリティ集団としての感覚を共有するようになったというのである。また、多くのイヌイットは、村での賃金労働に従事する一方で、近辺地域において、従来の生業活動を継続させた。それを通して昔の生活との接点を見出しつつ、現金収入を得るというこのスタイルは、人々に新たな「伝統」として受け入れられたのである[Patterson 1982:70-72]。

また岸上は、自分たちの生活を取り戻そうとする運動を通して、これまで以上にイヌイットという自己アイデンティティやヌナブト住民であるという自己アイデンティティの高揚が見られたことを指摘する[岸上 1996:28]。そしてこれらが、カナダ政府との政治的対立過程で生成されたものであるとの解釈を示す[*ibid.*:28]。これらの動きは、イヌイットが伝統的アイデンティティを模索する延長線上に新たな政治意識や民族意識を創り出し、近代社会に組み込まれることを前提に、イヌイットとして生き抜く方法を模索し始めたとみることができる。したがって、この時点で、イヌイット社会が近代社会の中にマイノリティ集団として実際に組み込まれたことを認識したことになり、それ以後の活動はその枠組みを維持したまま、組織としてアイデンティティの「再生産」を行いながらマジョリティ社会へ適応していくことに焦点がおかれる。

3. 多文化主義の時代

(1) 多文化主義への政策転換

1971年に、トルドー政権が打ち出した多文化主義への政策転換は、イヌイット社会にとって大きな転機となった。この政策転換の背景には、建国以後強化されたイギリス系カナダ人を頂点とする人種的差別階級がある。まず1960年にケベック州で「静かな革命」(the Quiet Revolution)が起こり、イギリス支配からの完全解放と純粋なフランス化を掲げたケベック分離・独立論が広まった。その後、譲歩案として連邦政府は2言語・2文化主義を打ち出したが、これに対しウクライナ系を筆頭に非英仏系の民族集団から強い批判が起こった。一般に、カナダとアメリカにおける多文化社会は異なる性質を持つとされ、アメリカ社会がさまざまな文化を溶かし、同化するメルティングポット(melting pot)と呼ばれるのに対し、カナダ社会はさまざまな文化や価値観を認めるモザイク(mosaic)であるといわれる[長谷川 2002:161]。中野はカナダでは、民族集

団ごとに社会階層が区分される傾向が強く、それがまた地域とも結びついていることを指摘する[中野 1999:197-198]。その結果トルドー政権は、それらの文化集団をなだめる折衷案として、「2言語の枠内での多文化主義」(Multiculturalism within a Bilingual Framework)を打ち出すにいたったのである。これには、カナダに存在するすべてのマイノリティ文化集団を支援し、カナダ社会に参加できるようにすることや、そのためにカナダにおける公用語の少なくともひとつを移民が習得するよう支援するなどの政策目標が掲げられた[木村 1997:69-70]。これにより、イヌイト教育の管轄が連邦政府から旧北西準州へ委譲された。そしてついに、イヌイトが教育政策策定過程に関わり、生活様式や言語、歴史などの文化的要素を含む教育政策が行われるようになったのである[下村 2001:180]。

イヌイトの民族運動は、イヌイト社会が急速な変化を体験する中、このような周囲の環境変化によって後押しされる形となった。上記に加え、浅井は、1970年代における、アラスカ先住民による土地権益請求運動の法的決着や、1971年に開催された国際コペンハーゲン会議によって先住民要求の正当性が示されたこと、そして1979年にデンマーク国会がグリーンランドに自治を与えることに合意したことなどを挙げ、この時期すでにイヌイトに有利な国際環境が整っていたことを指摘する[浅井 2004:155-156]。またスチュアートは、イヌイトがこの時期まで先祖からの土地に住み続けることができた理由として、マジョリティ社会から遠く離れ、彼らから「あまり魅力のない土地」と見なされてきた点をあげる。同じカナダ先住民でも、南部の人々(いわゆるインディアンと呼ばれていた人々)は早くから農地開拓のために、土地を追われていたのに対し、この点でもイヌイトは恵まれていたといえる[スチュアート 1993:106]。

その他長谷川は、「2言語の枠内における多文化主義」は、文化と言語を切り離して考える矛盾したものであったと指摘する[長谷川 2002:171]。ここには、多文化を容認することで各文化の言語の価値を認めたものの、公用語を最小限にとどめ、国家的統合をはかりたいという連邦政府の思惑があったと考えられる。

(2)さらなる民族自主決定権を求めて

多文化主義政策により、1970年代初め頃から、イヌイトの間で民族自主決定権を求める組織運動がより活発化する。もともと拡大家族集団以上の政治的帰属意識の薄

いイヌイットであったが、カナダのマジョリティ社会へ組み込まれていく中でマジョリティ社会のシステムを吸収し、マイノリティ集団としての民族意識を高め、政治組織を形成した。1970年に「先住民族権利獲得のための委員会」(Committee for Original Peoples Entitlement :COPE)を設立すると、翌1971年に「カナダのイヌイット同盟」(Inuit Tapirisat of Canada、以下ITC)、さらに1977年には「イヌイット汎極北会議」(Inuit Circumpolar Conference)を設立し、国内外におけるイヌイットの利害を代表する政治的組織を作り出した[岸上 1998:25]。

1976年になると、ITCにより先住民権益請求「ヌナブト」(Nunavut)を連邦政府に提出する。当初、旧北西準州すべてのイヌイットを代表して提出されたが、イヌイットの内部紛争により、中部および東部極北地帯のイヌイットを代表する形に修正され、翌年、北西準州を分割し、東部極北地域にヌナブトというイヌイットの準州を作することを請求する内容で最終的に提出された[岸上 1998:25]。

これをうけ、1980年に旧北西準州議会によって準州の分割が賛成多数で合意され、1982年の準州住民投票では賛成56%を得た。そして1992年、ヌナブトのイヌイットを代表する「トゥングヴィク・ヌナブト連合」(Tungavik Federation of Nunavut :TFN)と政府代表は、ヌナブト地域の最終的な土地請求問題において合意し、翌年にヌナブト協定を締結し、1999年4月1日に準州政府が発足した[浅井 2004:156-157]。

ヌナブト協定の最大のポイントは、イヌイットが実質的な民族自治を行える点である[スチュアート 1993:107]。そしてこれは、イヌイットが分離独立の道ではなく、カナダの主権のもとで条件付きの自治を選ぶことにつながった。ヌナブト協定によりイヌイットが民族集団として得た利益は、イヌイット語の公用語化、約35万平方キロメートルの土地所有権および準州内における狩猟・漁撈などの生業権の保障、約11億5000ドルの賠償、天然資源使用料を受け取る権利の確保などであった。また、準州内での自然保護を管轄する機構のメンバーのうち少なくとも半数はイヌイットの中から任命されることもその協定にもりこまれた。そしてイヌイットは協定に明記される権利・権益を引き換えに、一切の先住権、請求権、権原、利害関係を放棄することとなった。また、準州のおよそ80%の土地や資源に対する使用権は連邦政府に帰属し、もし将来的に人口の過半数をイヌイットが占めなくなった場合、「民族自治」とは呼べなくなるという不安が残される。しかしながら、今のところそのような人口構成における逆転が起きることは考えられない。ヌナブト準州政府も連邦政府とのつながりなし

には政治・経済的に自治政府を運営することが難しいため、このような協定内容で決着したといえる[Asch and Smith 1992:100-103 ; スチュアート 1993:107-108]。それでもイヌイットの土地所有や自治政府が認められた結果となり、それまでの民族運動で最大の焦点であったこれらの要求は一応の決着をみた。

(3)ヌナブト準州誕生(1999年)から現在まで

ヌナブト準州設立にあたり、住民の約85%がイヌイットであったため、彼らは「民族的」自治権を手にしたことになる。しかし、高い失業率に伴う低所得世帯の多さや、アルコール中毒患者の増加、高い自殺率など、準州設立当初から直面する課題は山積みであった。それらの背景には、同化政策の中で伝統的生活から近代的生活への急激な社会変化がある。さらに、圧倒的な近代化の波に見舞われたイヌイット社会では、イヌイットが社会のイニシアチブをとる機会が失われ、連邦政府から保護を与えられるだけの存在となってしまったことも深く関連している。したがって、新生ヌナブト準州政府が目指す解決策は、同化政策時代に排除されてきたイヌイットの文化 (Inuit Qaujimajatuqangit :IQ⁽⁸⁾) を政治、経済、教育等の諸政策の基盤に置くことで、イヌイットが現代カナダ社会においてイニシアチブをとれる能力を獲得する点にあった。

2004年11月16日の第2期立法議会のオープニングで、ヌナブト準州長官(the Commissioner of Nunavut)のPeter Irniqが政府の最重要課題にイヌイット自身による経済参加の活発化を置き、その次に教育問題を掲げるという内容のスピーチをした。その中でも、政策などの公的書類や資料を、イヌイット語でも入手できるようにする、という発言に大きな拍手がわいた⁽⁹⁾。イヌイットは、経済面でイヌイットが活躍する機会が増加することへの期待が大きかった。近代社会の知識も技術もなかった当時のイヌイット社会では、ヌナブト地域の経済活動が「南」のマジョリティ社会から来た人々によって担われており、イヌイットの就労機会は少なかったからである。現在、ヌナブト準州政府は大半がイヌイットの中から選出され、教育現場でイヌイット語を教える教師の需要が高まるなど、イヌイットであることで雇用される機会は広がったといえる。しかしながら、準州政府がいまだに雇用問題を強調するように、極北という特殊な地域において、近代産業を基盤とした近代的経済社会で地元民のイヌイットが活躍できるようになるには、まだ時間がかかるようである[スチュアート 1993:108,113-117]。

一方、教育に関しては、準州予算の中で最も高い割合（22%）がそれに当てられている。同州内における居住者全体の47%が19歳以下で、2011年までには人口が約2倍になる。よって、未来を担う若者にイヌイットの文化・言語を体系的に教えることで、現在の社会的諸問題を解決する試みがみられる[下村 2003 : 243-244]。

イヌイット語教育を例にとると、制度上は公用語となったイヌイット語であるが、英語が現在のイヌイット社会においても依然有利に働くため、現状として英語の必要性は無視できない。そこで準州政府は、英語とイヌイット語のバイリンガル教育を目指すことになったのである。しかし、現場には確立された教授法やテキストが不足しており、イヌイット語に関しても、教師の不足が指摘され、課題が多いことも事実である。

4. まとめ

以上本章では、イヌイット社会が経験した変遷をみてきた。また長い歴史の中で培われてきたイヌイット語の立場も、急激に変化する社会に影響され、この半世紀の間に大きく変化した。欧米社会と接触する以前のイヌイット語は、人々の生活のすみずみまで存在し、イヌイット独自の価値観や世界観を表し、独自の社会基盤を維持する役割を持っていた。欧米社会との接触当初までは、イヌイットの独自の生活様式は維持されていた。その結果、言語を含めた新しい価値観や世界観、社会システムに対し、イヌイットはあくまでも自発的に接触した。イヌイット語以外の言語は、「外部の言語」であり、イヌイット社会内では、イヌイット語の社会的役割が保たれていた。しかし、同時期に貨幣経済やキリスト教会との接触を活発化し、彼らの生活様式に取り入れていったことは、後の定住化から移動生活へ戻ることを不可能にさせた。

定住化以後、英語が支配する社会に取り込まれたことで、イヌイット語の社会的役割は失われた。特に定住化によって移動生活に必要な知恵や知識が不要になったことや、英語による学校教育によって、若者を中心にバイリンガルな社会へと変化したことがその要因に挙げられる。定住化にともなう規制や賃金労働、学校教育はそれまでのイヌイット社会に存在せず、イヌイット語にはない概念であり、イヌイットは社会から疎外感を感じた。さらに、英語習得が経済的にも求められたので、イヌイットの生活は政府からの補助金に依存するものとなっていった。このことは、それまで拡大家族集団の域をでなかったアイデンティティの拡大をまねき、同じ境遇にある人々が

自分たちを「イヌイット」と意識しはじめることにつながった。したがって、イヌイット語は、社会的にはその使用範囲を狭めたが、否定されたことへの心理的作用として、イヌイット語は「我々独自の言語」という文化的側面を高めたと考えられる。そして、連邦政府の多文化主義政策に便乗する形で、イヌイットの権利を主張する声を高めていった。しかしながら、イヌイット語が公用語のひとつとなったヌナブト準州においても、英語が経済を中心として社会的役割を高めている。その背景にあるものは何であるのか。そこで次章では、現在ヌナブト準州でみられる言語活動を事例に、ヌナブト準州の人々がイヌイット語どのように捉えているのかを考察する。

第3章 言語活動の諸事例

1. 言語使用例

(1)事例 1：ペリーベイ村の言語使用例

ヌナブト準州におけるイヌイットの言語使用例は、大きな社会変化の中で急速に変化している。本項では、大村が1992年から1994年の間に、ヌナブト準州ペリーベイ(Pelly Bay)村で調査⁽¹⁰⁾したイヌクティトゥット・ネツリック・アグビリグユアク方言⁽¹¹⁾の使用例(変化例)を取り上げる。彼は、この地域の住民に関する「民族科学的知識とその構造を明らかにするために」[大村 1994:106]行われた調査の過程で、以下の言語変化が確認されたことが明示している。

1)文法構造

大村によると、イヌイット語の構造には大きく2つの特徴がある。ここでは言語変換事例への理解を深めるために、それらの特徴を示す。1つは、「複総合的言語」として知られ、1つの単語の多くは、1つの独立形態素と複数の従属形態素から構成される。以下は大村による「複総合的言語」構造の説明である。

例えば、日本語での「私はこれからカリブー獵に行く」は“tuktuhiuniaqpunga”という一語で表現される。これは、tuktu(カリブーを意味する独立形態素)、-hiuq(を探す：名詞を動詞に変換する接辞)、-niaq(未来を意味する接辞)、-pu(直説法を意味する接辞)、-nga(1人称単数を意味する接辞)という1つ独立形態素と5つの従属形態素からなり、独立形態素である名詞tuktuに様々な意味を表す接尾辞が次々かつなげられた構造を持っている[大村 1994:107-108]。

また、独立の語として扱うことができるのは、独立形態素である名詞と動詞だけで、動詞の場合は、動詞語幹に従属形態素をともなって初めて独立語となる。イヌイット語はほとんどの場合、この名詞と動詞である。大村は、イヌイット語のもう1つの特徴として「様々な文法カテゴリーと文法関係による複雑な屈折変化」[大村 1994:108]を挙げ、その特徴によりイヌイット語の話者は常に、「カテゴリーを明確に区別し、自

分の話している内容がそのカテゴリーのどこに位置しているのかを的確に話し分けなければならない」[大村 1994:109]と結論づける。以下は大村による語の屈折変化の説明と、文献に提示してあった例文説明を基に筆者が整理したものである。

動詞に関しては、その屈折変化に関与するのは、法あるいは動詞形 6 種（直説法、疑問法、願望法、関係形、並置形、分詞）の区別、人称 3 種（1 人称、2 人称、3 人称：並置形に関してはこれらに再帰 3 人称を加えて 4 種）の区別、数 3 種（単数、双数、複数）の区別である。一方、名詞に関しては、格 8 種（絶対格、関係格、位格、向格、奪格、様態格、移動格）、数 3 種（単数、双数、複数）、所有者の人称 4 種（1 人称、2 人称、3 人称、再帰 3 人称）の区別が義務的に要請され、名詞、動詞をあわせて非常に複雑な屈折変化の体系が作られている[大村 1994:108]。

例 1> 「私はその人間（1 人）を見た」

inuk takuvara

←inuk +∅ : taku- + -va + -q + -ga

[人間] 絶対格/単数 : [見る] 他動詞 目的格 3 人称 直接法/主格 1 人称/単数
 (その人間を) : (私は見た)

例 2> 「私たち（2 人）はその人たち（3 人以上）を見た」

inuitmik takuvuguk

←inuk + -it + -mik : taku- + -vu + -guk

[人間] 複数⁽¹²⁾ 関係格 : [見る] 自動詞 直説法/1 人称/双数⁽¹³⁾
 (その人たちを) : (私たちは見た) [大村 1994:109]

2) 世代別言語変化例

大村は、インタビュー調査によって、上記したイヌイット語の 2 つの特徴のうち、語の屈折変化の使用において、当時の 40 代を境にそれ以下の世代は双数カテゴリーと複数カテゴリーの区別が無くなるという結果を得た。表 1・表 2 は、ペリーベイ村イヌイットの語尾使用例に関して、大村がインタビュー結果から作成した表の一部を筆

者が抜粋したものである。

	60代以上		50代		40代	
	双数	複数	双数	複数	双数	複数
1	-vuguk	-vugut	-vuguk	-vugut	-vuguk	-vugut
2	-vuhi	-vuhit	-vuhi	-vuhit	-vuhik	-vuhi
3	-vuk	-vut	-vuk	-vut	-vuk	-vut
	30代		20代		10代	
	双数	複数	双数	複数	双数	複数
1	-vugut	-vugut	-vugu	-vugu	-vugu	-vugu
2	-vuhi	-vuhi	-vuhi	-vuhi	-vun	-vun
3	-vun	-vut	-vun	-vun	-vuq	-vuq

表 1 直接法の語尾使用例 ([大村 1994:110]より筆者作成)

	60代以上		50代		40代	
	双数	複数	双数	複数	双数	複数
1	-gamuk	-gaptat	-gamuk	-gaptat	-gamuk	-gaptat
2	-gaptik	-gaphi	-gaptik	-gaphi	-gaptik	-gaphi
3	-mmanik	-mmata	-mmanik	-mmata	-mmanik	-mmata
4	-gamik	-gamit	-gamik	-gamit	-gamik	-gamit
	30代		20代		10代	
	双数	複数	双数	複数	双数	複数
1	-gaptat	-gaptat	-gamuk	-gamuk	-gaptat	-gaptat
2	-gaphi	-gaphi	-gaptik	-gaptik	—	—
3	-mmata	-mmata	-mmanik	-mmanik	—	—
4	-gamin	-gamin	-gamik	-gamik	—	—

表 2 原因の関係形（主に「～ので」を表わす）の語尾使用例

([大村 1994:110]より筆者作成)

縦列の数字は、それぞれ 1=1 人称、2=2 人称、3=3 人称、4=再帰 3 人称を表す。さらに、調査時期が 1992 年から 1994 年なので、2004 年現在では各世代のインフォーマットは表示年齢よりも 10 歳上となり、50 代未満の世代で双数・複数カテゴリーの変化が起こっていることになる。

表 1 からは、30 代では直説法の双数を表す -vu-guk の部分が複数の -vu-gut で表され、10 代、20 代では 双数-vu-guk の部分が -vu-gu に変化することがわかる。表 2 では、40 代以上は全く同じ使用例を示すのに対し、それ以下の年代は、双数・複数の区別がなく、語尾も変化している場合がある。大村によると、その他の法や動詞形の語尾でも、双数・複数カテゴリーの区別に関しては、おおかた同様の結果を得られたという。さらに、日常生活の場においても 40 代以上からはこの区別をしないと常に間違いを指摘されたが、20 代、30 代のインフォーマントからは、気にとめられず、彼らも区別しなかったとの記述もある[大村 1994:110-111]。

さらにいくつかの名詞についても、40 代以上は「人間（たち）」という名詞を inu-k (単数)、inu-ik (双数)、inu-it (複数) と使用するところを、20 代のインフォーマントは区別しておらず、双数、複数とも、inu-i と表現する等、双数・複数カテゴリーを区別しない点で変化がみられる[大村 1994:111]。

(2)事例 2：バフィン島の言語使用例

次の事例として、バフィン島に位置するヌナブト準州の州都イカルイトとイグルーリクにおいて、イヌイットの言語活動からイヌイットのアイデンティティを捉えようとした、Dorais と Sammons による人類学的調査研究を挙げる。この事例では主に 1995 年と 1996 年に行われたインタビューで、発話する本人とその相手によってどのような言語使用変化があるのか調査したデータが使われている。また 1998 年にいくつかの家庭や職場でどのような会話が行なわれているかを書き留めたデータも用い、イヌイット語の使用状況を考察している。また、調査者はすべてヌナブト北極大学⁽¹⁴⁾ (Nunavut Arctic College) の生徒とスタッフである。

Dorais と Sammons によると、イカルイトの人口(1991 年時)3530 人のうち 2075 人 (59%) がイヌイットで、そのうちイヌイット語を使用する人は 1855 人 (イヌイット内で 89%、全体で 52.5%) であるという[Dorais and Sammons 2000:93]。イヌイット以外の住民のほとんどは英語を第一言語とするが、250 人ほどはフランス語を第一言語

とする。一方イグルーリクの人口(1991年時)940人のうち885人(94%)がイヌイットで、そのうち805人(イヌイット内で91%、全体で85.5%)がイヌイット語を第一言語とする。事例のインフォーマントを第一言語で区別すると、イカルイトでは、イヌイット語152人(子ども102人、大人50人)、英語21人(子ども8人、大人13人)、フランス語11人(子ども6人、大人5人)、イグルーリクでは58人(子ども38人、大人20人)のインフォーマント全てがイヌイット語を第一言語としていた。ただし、イヌイットに焦点を当てた質問では、イヌイットではない人々は対象から外される[Dorais and Sammons 2000:92-94]。

ここでは以上のデータから主に地域別、世代別においてどのような言語活動の相違があるか整理する。

1) イヌイットの言語能力

Dorais と Sammons は、成人イヌイットを50歳以上、30歳から50歳の間、30歳以下の3つの世代にわけ、話す、読む、書く能力ごとに、イヌイット語のみ<I>、イヌイット語の方が使える<I+>、イヌイット語と英語の両言語<I-E>、英語の方が使える<E+>、英語のみ<E>の5つのレベルで区分した。その結果、年齢が言語能力に一番大きく関係することが明らかとなった[Dorais and Sammons 2000:97]。特に、当時50歳以上の73% (11/15) が<I>、20% (3/15) が<I+>に区分されるのに対し、78%の30歳以下と、76%の30から50歳のイヌイットが、<I-E>、もしくは<E+>に区分され、<I>はいなかった。

イグルーリクにおける同様の調査では、50歳以上の4人のうち1人が<I>、3人が<I+>となるのに対し、57%の30歳以下と、67%の30から50歳のイヌイットが<I-E>、<E+>と区分された。

以上から、イカルイトの方がイグルーリクよりもバイリンガルであるイヌイットが多く、また、年齢によって大きな隔りがあることがわかる。さらに、読み書きの面では両コミュニティの50歳以上が誰も英語を理解しないのに対し、50歳以下ではイヌイット語よりも英語の方を使用する者がかなり多いことが明らかである[Dorais and Sammons 2000:96-97]。

2) イヌイットの大人同士の会話

配偶者間で使われる言語では、イカルイトの 50 歳以下の多く(23/26)は、英語とイヌイット語の両方か、英語中心であるのに対し、イグルーリクでは 16 人中 2 人を除いて英語とイヌイット語両方か、イヌイット語中心であった。また、50 歳以上では、ほぼ全員(18/19)がイヌイット語だけを使っていた。Dorais と Sammons によると、イカルイトでは年齢が若くバイリンガルである夫婦ほど、英語での発話回数が増え、イヌイットだけの家庭内でも英語の使用頻度が上がる特徴もみられる。また、イグルーリクでは、イカルイトに比べ家庭内でイヌイット語を使用する機会が多いことも明らかになった[Dorais and Sammons 2000:97-98]。

友人同士の会話では、年齢が下がるほど英語を使用する機会が高くなる傾向がある。これは、両コミュニティ双方にみられる特徴である。さらに仕事を持つ人の方が持たない人よりも英語使用頻度が高いことも指摘される。ちなみに、Dorais と Sammons はこの事例について、職場ではイヌイット以外の人と話す機会が多いため、このような結果が出た可能性があると言及している[Dorais and Sammons 2000:99]。

3) イヌイットの子どもへの会話

イカルイトとイグルーリクにおける家庭内での言語選択の違いは、子どもとの会話にも反映されている。50 歳以下のイカルイト住民のうち 72%が英語とイヌイット語を同じくらいの頻度で子どもにむかって使用していたが、イグルーリクでは両言語を同等に使用していた人は 31%のみであった。また、50 歳以上の人でみると、イカルイトで 2 人が両言語を同等に使用する例を除いて、すべてイヌイット語のみで発話していた[Dorais and Sammons 2000:98]。ここで興味深い点は、両コミュニティともに、欧米人との混合家庭を含む全ての家庭で、親からほぼ英語、もしくはすべて英語で発話される子どもがいなかったことである[Dorais and Sammons 2000:98]。以上より、イヌイットの大人は、配偶者よりも子どもに対してイヌイット語を選択的に発話することが指摘できる。

次の会話例は、1998 年にイヌイット語を理解する調査者が、イカルイトの 45 世帯において世帯内の言語行動をそれぞれ約 3 時間にわたって記録したデータの一部として事例論文に提示されるものである。31 歳の母親 (M) と 38 歳の父親 (F)、2 人の 10 代の子ども (1、2) と 30 代の知人 (A) の間で会話されている[Dorais and Sammons

2000:94-95,105].

M: You should use your head dear. Taimak kisiani ililangajutit [it is only this way you will arrange it].

A: Ukua change-riaqtulaaliqqatit [you will go and get change for these ones].

1: Change-riaqtulangajakka [I will go and get change for them].

2: Una [this one] dollar, right?

M: Ikkua qauppat [these ones tomorrow]. Is it tomorrow?

F: Friday?

2: That boy said that you beat him up.

M: Shawn namunngaqqaummat? [where is Shawn gone?]

2: Home.

1: Dad, where are we going to put the sign up?

F: Parnaivik [(at the) Parnaivik building].

[Dorais and Sammons 2000:105]

英語とイヌイット語が両方使われること、特に子どもは主として英語で発話し、イヌイット語で発話されることが顕著に現れている。ここでは子どもが英語に傾倒したバイリンガルであることに対し、同じくバイリンガルである大人は意識的にイヌイット語を使用することがわかる。ここからは、イヌイット語を次世代に継承させようとする大人の意志が感じられる。

4) イヌイットの子どもの言語使用例

イカルイトの公立学校は、イヌイット語コースと英語コースがある。イヌイット語コースの場合、3年生まではイヌイット語で教えられ、4年生からは英語での教授に切り替わる。英語コースでは、イヌイット語は一切教えられない。イヌイットの子どもの多くは、イヌイット語コースを選ぶ。また、イグルーリクの学校には、イヌイット語コースのみがある。

Dorais と Sammons は、1年生から12年生までの子ども達（イカルイト102人、イグルーリク38人）にインタビューを行っている。それによると、学年が上がるにつれ

英語使用度が増加し、両親、兄弟、友達の順にイヌイット語の使用度が高い点を指摘する[Dorais and Sammons 2000:101-103]。このことは、家庭内ではいまだにイヌイット語が広く話されていることを示す。

学校の教室の様子を見ると、イカルイトの場合は、イヌイット語中心のカリキュラムでも、早い場合で1、2年生の頃から友達との会話を英語で行う子どもがいるが、一般的には5年生まではイヌイット語と英語の両方を会話に用いることが多い。6、7年生になると、それまでバイリンガルな言語活動を行っていた者も英語中心の言語活動に変わり、8年生以上ではいくつかの限られた言葉以外はすべて英語のみで会話される。

イグルーリクでは、イカルイトに比べるとイヌイット語の使用頻度が高い。特に3年生までは、すべての生徒がほぼイヌイット語のみ会話に使用する。さらにバイリンガルであっても8、9年生までは、イヌイット語を用いる者が英語を用いる者より多い。10年生でようやく英語中心のバイリンガルな言語活動にシフトするが、それでもクラスの何人かの生徒はほぼイヌイット語で会話する [Dorais and Sammons 2000:102-103,105-106]。

このことから、イヌイットの子どもに英語が浸透する割合やペースは、かなり地域差があることがわかる。加えて、1985年には、イカルイトでは学齢期の子どもの54%が、自分の兄弟とイヌイット語またはほぼイヌイット語で会話していた。友達とイヌイット語で会話していた子どもは全体の27%で、10年後にはそれぞれ26%と17%に減少した。またイグルーリクでも、イカルイトほどではないが、同様の調査で兄弟への使用77%が55%に、友達への使用61%が39%にとそれぞれ減少しており、言語活動の変化の傾向が近年高まっている[Dorais and Sammons 2000:109]。

5) イヌイットにとってのイヌイット語

事例2では、「若いイヌイットがイヌイット語を話すことは重要か」という質問に、1人のインフォーマント⁽¹⁵⁾を除いて老若男女関係なく全てのイヌイットが「重要」と答えたという結果が示される。その理由の多くは、イヌイットとしてのアイデンティティ持続と関連する。また、若者の中にはイヌイット語と英語の共生を唱える声もあった。以下はそのいくつかの例である。

- Inuit are a small population. If their language becomes extinct, it will be very sad.
- Language is part of our tradition, it must be kept alive.
- We are more Inuit if we speak Inuktitut.
- If children do not speak like their parents did, their way of thinking will be changed.
- Yes, young people should speak Inuktitut. It is good to share in two cultures.
- Young people should speak Inuktitut. It is the language of our ancestors and in the near future, knowledge of Inuktitut will be compulsory if one wants to find work in Nunavut.

[Dorais and Sammons 2000:107]

しかしながら、老人世代の中には悲観的な考え方もある。以下の回答からは、イヌイット語を若者に継承してほしいと考えながらも、若者の様子から不可能ではないかと危惧する様子が伝わる。

- I would like young people to speak Inuktitut, but the next generation will not speak it.
- Yes, it is important for young people to preserve Inuktitut, but they mostly speak English.
- If we want youngsters to speak Inuktitut, we must address them in that language; otherwise, it will be lost.

[Dorais and Sammons 2000:107-108]

以上に見られるイヌイットの言語活動より、Dorais と Sammons は、どの世代のイヌイットにとっても、イヌイット語は「イヌイットである (being Inuit ; inuuniq)」ために必要不可欠なものであると捉えられているという[Dorais and Sammons 2000:108]。さらに、英語は労働市場やより広い世界にアクセスするために必要なものであると捉えられ、イヌイット語と英語双方が社会に存在する上で、選択的に言語を使用している様子が伺える。このことは、事例でも、イヌイット社会は場面に応じて言語選択を行なうバイリンガル社会であり、経済的、社会的局面では英語が優勢で、政治的、文化的文脈ではイヌイット語が優勢である[Dorais and Sammons 2000:108-109]。実際に政府機関以外に就職するためには英語が欠かせない実情を考慮すると、イヌイット語がいまだに多くの人によって話されるとはいえ、経済的、社会的双方の面で英語が優勢であることは事実である。しかしヌナブト準州誕生で政治面におけるイヌイット起用が

高まり、イヌイット文化の保持を求める声や期待も高まってきている実情から、イヌイット語に同準州内部からはイヌイットの「文化の核」としての重要性が高まっている。

2. 世代カテゴリー

ここでは上記2つの事例や他の世代別言語使用例を扱った資料をもとに、イヌイット語の使用例が異なる3つの大まかな世代に分け、それぞれの特徴を整理する。

(1)イヌイット語のみを使用する老人世代

Shearwoodによると、イグルーリク地方では、定住時にすでに成人、あるいはほぼ成人していた1946年以前に生まれたイヌイットと、定住化によりなんらかの学校教育を受けたそれ以後の世代とは、シラビックスの読み書きに違いがみられ、イヌイット語の使用頻度も異なる[Shearwood 2001:301-302]。これは本章第1節第2項で取り上げた事例で、同地方の調査において老人世代とされた年代と一致するので、イグルーリク地方では50歳代後半、もしくはそれ以上の世代がこのカテゴリーに入る。大村が調査したペリーベイ村における事例では、その当時60歳代以上、すなわち現在70歳代以上のイヌイットが、イヌイット語のみを理解する。よって、老人世代を形成するイヌイットは、現在において約60歳代から70歳代以上の世代といえる。

この世代の特徴は、ツンドラの地で伝統的移動生活を送った経験を持ち、同化政策が始まった頃にはすでに成人であったため学校教育を受ける機会を得なかったことにある。そのため、イヌイット語や、イヌイットの伝統的文化とのつながりが最も密接であり、その知識も豊富である。さらにこの世代の存在は、イヌイット社会の独自性が語られる根拠そのものとなる。他方、彼らは英語を解さないで、一般に現在でもマジョリティ社会とのつながりが弱い。そのため様々な場面で、バイリンガルである子や孫の世代との間に隔たりが生じる。特に若者世代はイヌイット語の能力が低いいため、老人の話すイヌイット語を理解できず、コミュニケーションがうまく取れなくなっているという[大村 1994: 107]。さらに、かつてイヌイット社会では、老人は大地に根ざした豊富な知識と知恵によって尊敬の対象であったのに対し、近代社会ではそのような知識や知恵は無力化し、老人の影響力は低下した。そのため、老人たちの中には、「イヌイットらしくない」若者や社会を嘆き、イヌイット文化や価値観の復活

を望む者もいる。しかしその一方で、ヌナブト準州の教育政策に老人の意見が反映されるなど、文化的側面から老人がイヌイット社会に与える影響は残り、老人を尊重する伝統は、形を変えながらも、現代社会でなお持続されていると見ることができる [Utatnaq 1988:246 : 下村 2001:180]。この背景には、多文化主義というカナダ政府の政策がある。1988年に公的にマイノリティ文化や言語の保持を認める法としては世界で初めてであった多文化主義法が発効された。それは「カナダにおける多文化主義の保存と増進を目指し、連邦レベルにおいて各民族集団の文化および言語を奨励し、差別をなくし、お互いの文化の認識と理解を促進し、文化の重要性を考慮した制度上の変革を促進すること」 [長谷川 2002:169]を求めるものであった。近代社会の枠組みの中に存在するヌナブト準州では、イヌイット独自の価値観や世界観をすべて体现することはできない。しかし、文化や言語の保持はカナダ政府によって認められており、それが、イヌイット文化や言語に精通した老人の文化的価値を高めていると考えられる。

(2)イヌイット語と英語のバイリンガル①：中年世代

この世代は、同化政策初期から 1971 年に多文化主義政策に切り替わるまでの間に学校教育を受けている世代である。学校教育を経験し、英語を修得したことによりマジョリティ社会との接点を持つが、英語を解さず、マジョリティ社会との接点も少ない親世代との断絶が目立つようになった。また、世代内の個人差が大きいことも、老人世代とは異なる点である。同化政策がイヌイット社会に導入された年代はヌナブト準州内の各地域でかなりばらつきがあるので地域によって多少年齢が前後するが、連邦政府が第 2 次世界大戦以降に同化政策を本格化し始めたことを考慮すると、現在およそ 40 歳代以上から 60 歳代以下の世代が、これに相当する。

Shearwood は、1946 年から 1970 年の間に生まれ、学校教育をうけたイグルーイクのイヌイットを大きく 2 つに分け、それぞれの性質を指摘している。一方は、学校教育から英語や近代知識を身につけ、マジョリティ社会との接触を図るとともに、イヌイット語やイヌイット文化にも高い関心を示すエリート層のイヌイットである。彼らは外部社会にむけてイヌイットの権利を政治の場面で語る役割を担うとともに、イヌイット社会内にむけたイヌイット語によるメディアや教育を通して、イヌイットの言語、文化、アイデンティティなどの価値を強化する役割も担う。また、両言語に精通していることから、老人世代とマジョリティ社会をつなぐ媒介者としての役割も果たして

きた[Shearwood 2001:303-304]。

もう一方はそれ以外の学校教育経験者で構成され、バイリンガルではあるが、エリート層に比べ教育水準の低いグループである。教育欠如の理由は様々であるが、彼らの親世代が、欧米社会的教育の重大性を認めていなかったため、学校を中退しても誰からも咎められなかったり、高等教育を受けるために村を出ることに親が理解を示さないなどの理由で、教育機会を失った例もある。イグルーイクで仕事を得るためにはなんらかの専門的な知識や資格が必要で、彼らは教育の欠如のために職につく機会が少ない[Shearwood 2001:304-305]。

しかしながら、一方で、イヌイット語と英語のテキストを使う場合、彼らのほとんどが英語のテキストを先に読むなど、言語活動では老人世代から切り離された側面を持つ[Shearwood 2001:304]。1988年のイカルイトにおける言語変化を論じた Utatnaq は “Many young people are speaking broken Inuktitut just as they speak broken English.”[Utatnaq 1988:245]と、両言語ともに不完全にしかマスターできないイヌイットの若者を指摘している。

これらからは、マジョリティ社会にもイヌイット伝統社会にも属せないイヌイットの姿がみえる。学校教育を通して英語や近代的知識を入手するものの、マジョリティ社会で活躍するほどの知識を持たない者は、伝統的技術の欠如から、伝統的生活に戻ることもできず、マジョリティ社会に参加することもできない。結果として連邦政府の生活保護を受けながら、定職を持たずに暮らす貧困層のイヌイットが増大した。アルコール中毒や高い自殺率などの社会問題が顕在化したのも、この世代からである。

中年世代は、エリート層の出現によって、社会内外で「イヌイットである」ことが強調され、新たな自己アイデンティティを高めたが、同時に欧米的価値観とイヌイットの伝統的価値観の間で従来の自己アイデンティティを喪失しはじめた世代であるといえる。

(3)イヌイット語と英語のバイリンガル②：若者世代

この世代には、30歳代以下の人々を含む。欧米的価値観に基づく教育を受けると共に、多文化主義政策の導入にともない、イヌイット語を使ったイヌイットの文化や価値観に配慮した教育にも接してきた世代である。

この世代のイヌイットは、親世代にみられる2グループ化が進み、仕事を持つエリ

一層は英語の方が使いやすいと考え、他方仕事を持たないイヌイットは、イヌイット語か、英語とイヌイット語両方を使うことを心地よいと感じる例などが報告されている[Dorais and Sammons 2000:107]。また、事例2の子どもたちの教室での言語使用をみると、成長するにしたがい明らかにイヌイット語の使用頻度が落ち、英語へシフトする様子がうかがえる。しかし、「若いイヌイットがイヌイット語を話すことは重要か」という質問に対し、若者も、「重要」だという認識を持っている[Dorais and Sammons 2000:105-107]。

さらに、スチュアートや大村は、幼児から12~13歳までの子どもは、イヌイット語を理解しても話そうとしない場合も少なくない点を指摘する。この世代のイヌイット語の使用頻度とその知識が低下しているため、老人世代との会話が全く成り立たないことさえあるという[大村 1994:107 ; スチュアート 1999:131-132]。事例2で取り上げたように、30代以下の若者は突然会話の途中で英語とイヌイット語を切り替えて話す傾向がみられ、ごくありふれた日常会話でも英語とイヌイット語の両方が使用されていることがわかる[スチュアート 1999:131-132 ; Dorais and Sammons 2000:104-105]。

実際にイグルーリクの小学校でイヌイット語を教える Arnatsiaq は、子どもから「英語の方が簡単だから、英語で書いてもよいか」と頻繁に質問されるという[Arnatsiaq 2002:182]。イヌイット語を学習する意欲が全くない子どもは、確実に存在する。彼女は、教材もカリキュラムも教員もまだ不十分であるとしながらも、その現象の主な要因として、週5日まるまる英語で授業を行い、イヌイット語にかける時間は30~40分であるという大きな格差を指摘する。彼女は保護者が家庭内でイヌイット語を使用する頻度をあげることが、子ども達の学習にも役立つと述べる[Arnatsiaq 2002:181-182]。

以上から、この世代は、学校教育の方針転換により、言語選択する自由を増した世代ではあるが、彼らが必ずしもイヌイット語を選択しているとは限らないことがわかる。宮岡は、南西アラスカ、ユピックの若者世代が、中年世代までの人々が英語に対して抱く「押し付けられた言語」という思いと抵抗感を喪失し、受容する傾向を示すことを指摘する[宮岡 1996:24]。ヌナプト地域における若者にも、同様の傾向がみられる。英語は「押し付けられた外部の言語」というより、「イヌイット社会に存在する言語のひとつ」として認識されるのである。しかし、カナダの多文化主義政策によって、独自の言語の文化価値を認識しており、バイリンガルであるという自己アイデンティティを保持している。

このように、バイリンガル社会であるヌナブト準州で育った彼らにとっては、英語が身近な言語として存在する。しかしそのような環境でも、ほとんどの若い親たちは、イヌイット語を話そうとしない子どもたちに対しイヌイット語で話しかける努力をする。若い親たちもイヌイット語の重要性を理解し、次世代につなげようとする点で、イヌイット語の文化的価値が認められているといえる。その一方で、若者は、仕事場などを中心に日常生活で英語を抵抗感なく利用する。したがって、この世代は言語選択の幅を拡げ、ほぼ無意識のうちに英語に傾倒したバイリンガルの言語活動を行っているといえる。

3. 言語使用例が変化した諸要因

ここでは、上記の事例、世代カテゴリーの特徴から浮かび上がる言語使用の変化における諸要因を、第2章で述べたイヌイット社会の変遷をふまえながら考察する。

(1) 同化政策による定住化と学校教育

同化政策により、イヌイットは一定の集落に定住するようになった。その結果、イヌイットの子弟に対する政府による学校教育が可能になった。事例からみられるイヌイット語使用の変化はほぼ全て定住後に学校教育の余波として変化しており、定住化と学校教育がイヌイット語におよぼした影響は大きい。

さらに、多文化主義政策の中進められる教育カリキュラムも、大規模な村のイヌイット語をもとにテキストを作成するなどの理由から、方言の数が急速に減少していることが報告されている[岸上 1998:220]。このことから、ヌナブト準州誕生にともなうイヌイット語の公用語化も、それがいずれ標準語化され、方言数を減少させる要因の1つになるかもしれない。そうなると、多文化主義政策やイヌイット文化を中心に捉えた教育政策であっても、少数派のイヌイット語に影響を与える可能性は高い。

また宮岡は、英語と民族語による2言語教育は英語進出を促進する要因になり得ると述べる[宮岡 1982:48]。この場合は、効率的に英語へのシフトが行われることが目的であり、民族語の保持が目的ではない場合、民族語は英語へのつなぎでしかない。宮岡が例とするアメリカのユピック社会では、実際に2言語教育が民族語の消滅に拍車をかけた結果となっており、民族性を意識して行われるはずの2言語教育も、その実施方法の検討が必要だと指摘する[宮岡 1982:47-49, 1996:24]。スチュアートによると、

ヌナブト準州の2言語教育では、英語への移行のためだけではなく、民族的価値観を育てる2言語教育（維持型）であるので、アメリカのユピックで行われた2言語教育よりは民族的独自性を維持するカリキュラムとなっている。しかしながらスチュアートは、維持型のカリキュラムであっても民族語と伝統文化の授業以外は英語で授業が進められるので、英語が民族語よりも重要であると認識される傾向にあることを指摘し、将来イヌイット語が文化的価値を保ち続けられるか問題視する[スチュアート 1999:127]。

このような指摘と事例2のイカルイトのクラスにおいて発話される言語が、イヌイット語から英語にシフトする様子を照らし合わせると、「全く理解されない」英語ではなく、「理解できる」英語だからこそイヌイット語に代わって使用されるようになるといえる。さらに、言語シフトを行なう生徒から抵抗感が全く感じられないことから、都会における学齢期のイヌイットの言語活動は、第1言語のイヌイット語に関しては、その実質的価値が低い「語り」となってしまったと考えることもできる。これは、親世代や祖父母世代がイヌイット語に高い文化的価値をおき、子どもに対して発話することでそれを継承させようと努力する様子を考えると皮肉な結果である。ただし、非イヌイットの割合が高い都会においても若者世代がイヌイット語に対する一定の愛着や母語としての認識を持つことから、質を変えながらもイヌイット語の文化的価値は存続されているとみることもできる。

ここからは、不可抗力のうちに英語を押し付けられた世代の、自分達の言語を取り戻そうとする心理的作用が、世代ごとに文化的内容の薄い「イヌイットであるためのイヌイット語」という「語り」となり、若い世代に受け継がれる様子が浮かび上がる。そもそもこの「語り」は、伝統的イヌイット社会で中心的言語として機能していたイヌイット語が急速に社会的価値を失った経験から、老人や中年世代の人々を中心にイヌイット語に対する文化的な付加価値が生まれ、「民族のシンボル」として存続されるべきという「語り」となって文化的に復権する動きであった。さらにこの「語り」は政治的な面でも利用され、イヌイット語の使用目的が実質的なものからシンボル化され、政治的・文化的に利用されるものへと変化した[Dorais and Sammons 2000:108-109]。

しかし学校教育や社会変化によって「語り」自体もその内容が変化し、若者世代は実際にそれを使用言語としてではなく、そこに「存在する」イヌイット語として文化的価値を認識する傾向があらわれている。そしてそれは言語をシンボル化する動きであ

老人、中年世代
この語り
政治的な面
シンボル化
の存在
の存在
の存在

36 10-11
たせ
「しかし、(2)にたつ」?

った。

(2) テレビ・ビデオの普及と欧米文化の浸透

スチュアートによると、1970年代以降、テレビ・ビデオといったメディアがイヌイット語に大きな影響を与えている。イヌイット側も欧米メディアが文化や言語に与える影響をテレビ受信の開始当初から認識しており、イヌイット語によるイヌイット独自の放送番組を作成し、放送するなどして対応している。しかし現実には、英語があまり得意でない世代以外は、イヌイット番組を進んで見ない。多くの家庭ではアメリカやカナダのスポーツ番組、映画やマンガがずっと流れており、イヌイット語番組の視聴率が最も低いという[スチュアート 1999:130-131]。以下はスチュアートが目撃したペリーベイ村のある家庭の子ども達の様子である。

去年、私が世話になった家庭は7歳の長女、4歳の長男、2歳の次男からなる親子5人の家族であるが、子どもが家にいる間中、遊んでいようと食事をとっていようと、マンガが絶え間なく流れていた。子どもを寝つける時にもマンガ、朝に目が覚めるときにもマンガ、という具合にテレビは夜通しつけっぱなしであった[スチュアート 1999:131]。

またスチュアートは、12～13歳の子どもたちが専用のテレビやビデオを持ち、香港のカンフー映画やアメリカのアクション映画のビデオを繰り返し見るので、日常会話に映画のセリフが多く登場し、イヌイット語に影響を与えていると指摘する[スチュアート 1999:131]。イヌイット語によるビデオもあるが、好まれていない。

また、同様に岸上は、メディアのイヌイット社会に与える影響を主張する。彼は、「テレビは欧米の価値観や生活様式をイヌイットの間を広める役割を果たし（中略）子供はテレビ番組を通して英語に一日中接し、カナダの欧米文化を習得してきているといっても過言ではない」[岸上 1996:25]と言い切る。イヌイット語による放送が、カナダ放送協会（CBC）の Canada North とイヌイット放送協会（Inuit Broadcasting Corporation : IBC）を合わせて1日平均7時間であるのに対し、1990年代の打ち上げによって始まったマルチチャンネル通信衛星放送は、アメリカ番組を中心に24時間放送している。情報量として、英語が優位に立つことは明らかである[スチュアート

1999:131]。

これらの主張から、メディアが若者世代を中心としたイヌイットに与える影響は大きく、それが彼らの価値観やイヌイット語に反映した形で上記にみられるような言語活動の変化が起こっていると考えられる。

4. 多文化主義国家カナダ

イヌイット語を第1言語とするイヌイットだが、彼らのほとんどは英語とのバイリンガルである。そして若い世代を中心に英語へ傾倒する言語活動がみられる。しかし同時に、若い世代を含めたイヌイットのほとんどが、イヌイット語を保持するべきであると捉えている。この背景には、イヌイット語とカナダ政府の打ち出す多文化主義との複雑な関係が挙げられる。カナダは1971年の多文化主義宣言を受けて、カナダ国内のマイノリティ集団の母語保持を目的に、遺産言語教育⁽¹⁶⁾を開始した。1980年代ころには、このプログラムを受けた生徒が自文化への誇りや他文化への理解を高めたといわれる[長谷川 2002:184]。しかしながら、このプログラムは1990年代に入ると経済不況のために連邦政府の予算が打ち切れ、州政府からの援助も減少した。そしてこの流れの中で遺産言語教育も外国語教育として位置づけられるようになった。長谷川は、カナダ政府の言語政策は、結局2公用語を伸ばす言語教育に重きを置いていると指摘する[長谷川 2002:187]。つまり、多文化主義であるとしながらも、英語・フランス語とその他国内のマイノリティ言語の地位とは大きな隔たりがあるのである。この点で、カナダの多文化主義は矛盾を含んでいる。しかしこの矛盾が、ヌナブト準州創立に向けた動きの中で、イヌイット語を公用語とすべきであるという認識につながったと考えられる。また、イヌイット語を公用語として獲得する過程で、イヌイットの自己アイデンティティにおける言語の文化的価値も高まったと考えられる。

5. まとめ

以上、イヌイット社会における2つの言語使用変化の事例から、イヌイット語のみを使用する老人世代、英語とイヌイット語を使用する中年世代と若者世代の2つの言語使用世代を区分し、なぜ言語使用に変化が生まれたのか、その背景を考察した。イヌイットはその社会的環境における劇的な環境の変化を経験し、世代ごとにイヌイット語の知識が薄れ、使用頻度が低下している。その中で全世代のイヌイットがイヌイ

ット語を「イヌイットである」ために不可欠な要素として捉えている点は、彼らのアイデンティティのあり方を考える上で、特に強調されるべき点である。イヌイットとイヌイット語は今日の文化において強い結びつきを維持しているのである。ここには、英語が持つ社会的優位性を認識した上で、「語り」によってイヌイット語の価値を強調するイヌイットの姿が映し出される。そしてその背景には、カナダの2言語・多文化主義により、民族文化と民族言語の保護の認識を強めながらも、公用語として英語が優先されてきた社会がある。また現在でもイヌイット語は、ヌナブト準州に限った公用語にとどまる。よって、カナダのマジョリティ社会との関係の上では、英語を使用する必要性が高い。したがって、自文化である「イヌイットの言語」を取り戻す動きの中で、彼らの自己アイデンティティと言語は強く結びついたと考えられる。

以上を踏まえ、現代イヌイット社会におけるイヌイット語の位置を導き出すとき、そこには異なる性質を持つ2つの言語活動が見られる。ひとつはイヌイット自身が文化の核として認識し「語り」として利用することで、その高い重要性を認め続けられるイヌイット語であり、^①もうひとつは急激な社会変化とそれに伴う英語の進出によってその社会的地位を下げ続けるイヌイット語である。これを言い換えると、現代社会におけるイヌイット語には、イヌイットであることを表象する役割を持つ言語と、マジョリティ言語の進出によってその影響範囲を狭めるマイノリティ言語という2面性が存在するということである。

ではこの2面性は何を意味するのであろうか。またそれは、現代において「イヌイットである」ということの意義とどのように関係するのだろうか。そこで次章では、2面性を持つイヌイットの言語活動から、イヌイットの自己アイデンティティの形成要因を抽出し、この2面性が他の形成要因とどのような関係性を持つか考察することで、2面性の持つ意味をさぐりたい。

第4章 ヌナブト準州・イヌイットの自己アイデンティティ

1. アイデンティティ形成要因の抽出

(1)政治活動

同化政策による定住化にともない、イヌイットが自分たちの社会に対するコントロールを失い、伝統的アイデンティティが変化されたことは前にも述べたが、ここで重要な点は、彼らが言語的・社会的選択権を持たなかったことである。マジョリティ社会に組み込まれてからは、定住生活のあらゆるところで、英語と英語による価値観が支配し、イヌイットが持っていた言語や文化は無視された。マジョリティ社会の価値観に立った先住民政策が行われたため、イヌイットにとって大きな不満を残すものとなった[加藤 1990:75,77]。この結果、イヌイット内部において、拡大親族集団の枠を超え、さらに大きな組織を持ち、イヌイットの連帯を高めることで民族の独自性を保つ必要があるという認識が広まる。そして、全国組織を形成し、民族として政治的権利を求める声を高めたのである。したがって、政治活動は彼らの自己アイデンティティと非常に密接な関係にあるといえる。この流れの中で言語活動は、民族言語という本来の文化的象徴の役割を担い、政治スローガンとして取り込まれてきた。

この背景には、1970年代以降、先住民の権利がカナダ政府によって認識され始めたことが挙げられる。カナダ政府の援助を受け、イヌイットは民族活動を国際組織にまで発展させ、各地の先住民との連帯を深めた[加藤 1990:79]。その中でイヌイットも、言語の重要性を認識するようになった。その結果、英語を解さない老人世代はそのスローガンの根拠となり、台頭してきたバイリンガルの中年世代によって、言語の文化的重要性が語られ、イヌイット内で自分達の文化、ひいては文化の核である言語活動保持を求める声が高まった。ここでイヌイット語は、外部に向けた自己表象的役割を果たし、イヌイットのアイデンティティを高揚させる要因となることがいえる。さらに、このような政治活動を通じて「同一言語集団イヌイット」として、内部における自己アイデンティティを生んだ。また、ヌナブト準州という形で土地請求と自治政府の要求を達成したイヌイットは、イヌイット語やイヌイット文化をシンボル化することで、内部の自己アイデンティティを保たせようとしている。

政治的
活動
と
民族
言語
の
関係
は
密接
な
もの
で
あ
る
と
い
え
る
。

現在においても、イヌイット語を基盤とするイヌイット文化教育をヌナブト準州で実践することを政府が公言し、2020年までにヌナブト準州内の学校で、バイリンガルカリキュラムにもとづいた教育がなされるよう政策が進められる。

その他の要因として、イヌイット語が失われる可能性がある、というイヌイット内の危機感が考えられる。若者世代を中心としたイヌイット語離れの傾向があることをイヌイット社会も認識している。そのためヌナブト準州政府は、独自の文化を継承するためには独自の言語が必要であると教育政策や語りとなりしばしば強調する。これにより、語りの上では、ほぼすべての世代において、イヌイット語は自己アイデンティティのシンボルであり、ベクトルであるという認識が広まっている[Dorais and Sammons 2000:109]。さらにヌナブト準州誕生によって、イヌイット語が公用語化され、地名をイヌイット語で復活させるといった、言語復権の動きもみられる。しかしながら現実には、欧米メディアや英語の社会的利便性により若者世代の英語使用頻度は高まっており、イヌイット語に実質的な価値を認める中年、老人世代に比べ、より象徴的な意味に言語の価値を置く傾向は続いているといえる。またこのことは、カナダ政府による2言語・多文化主義とも結び付けられる。前述のようにイヌイットは、国内外の民族運動を通して、固有言語の重要性も認識した。しかしカナダ政府は民族文化を公的に認める反面、英語とフランス語（公用語）の地位を維持する政策を行った。その結果、文化的にはイヌイット語の重要性を認識していても、社会的にイヌイット語を使用できないという状況を生んでいる。そのため「イヌイット語は大事である」という言葉だけが独り歩きし、イヌイット語のシンボル化が進んでいると考えられる。

さらにヌナブト準州設立まで政府機関における非イヌイットのポストをイヌイットが占めるようになり、イヌイット語使用者による政治が行なわれるようにもなった。しかしその事態は、イヌイットが連邦政府との交渉のために高い英語能力を求められるという皮肉な状況をも生み出しているという[スチュアート 1999:133]。つまり、その意味においてヌナブト準州の誕生は、社会的にイヌイット語を普及させるのではなく、むしろ英語の必要性を高める結果となったのである。

イヌイット語はますます実質的な使用空間を狭めている。それは、実質的機能ではなく「固有言語」という語りによって、政治的・文化的シンボルとしての機能をより強めているといえる。

(2)経済活動

イヌイト社会の経済は、貨幣経済と生業活動の2重経済である。ヌナブト準州人口の85%を占めるイヌイトのうち、定職についているのは46%であるという。しかしこの数字は求職をした人から計算されているため、実際の失業者はさらに多く、準州人口の70%に達するとする見方もある[スチュアート 1993:115]。

イカルイトなどの大都市は少ないが、周辺の村では今でも定職を持たず、生業活動を行なうイヌイトがいる。生業活動も機械化が進み、スノーモービルやライフルの銃弾など、現金なしには行なえないのが現状である。さらに、南カナダから輸送されてくる食料品、日用品などの購入が増え、現金への依存が増している。しかも飛行機による輸送が行われているため、物価も南のモントリオールなどの都市と比べ2~3倍になる。また極北特有の環境で経済開発も阻まれるため、多くの人が仕事につきたいと考えていても、その供給がほとんどないというのが事実である。その結果、国家からの「福祉手当やさまざまな生活補助金や、政治協定によって定められた援助プログラム」[岸上 2004:23]に頼って生活するイヌイトが多い。

経済活動においては、いまだにカナダのマジョリティ社会から派遣された非イヌイトが活躍し、イヌイトの活躍できる場が少ないといえる。イヌイトに近代的知識や技術が欠如していることがその一般的理由として考えられる。さらにいうならば、ドロップアウトの多さがある。20代前半のイヌイトのうちの59%が高校を修了していない。そのため、就業に必要な知識や技術が身につけられず、就職口がない。また、このような専門知識、専門技術の習得は主に英語によるため、イヌイト語とのバイリンガルとはいえ、「専門的な知識を吸収するには到底およばない」[スチュアート 1993:113]のである。つまりここには、バイリンガルであっても両方中途半端で、イヌイト語が第1言語ということは経済的には足かせとなる現実がある。それならば、イヌイト語を使用する雇用機会の増大を、とヌナブト準州誕生によって期待する声も多かった。しかし、上記の地理的な諸要因もからみ、極北で貨幣経済にもとづいた発展を目指すのは容易ではない。近代的な社会を築こうとすれば、それだけ経費がかかるからである。例えば、家を1軒立てるのにかかる費用を借料に換算すれば1ヶ月に1,500ドルから2,000ドル(12~16万円)かかるといわれる。実際の家賃は収入に応じて35ドルから450ドルの間に設定されているので、この差額はすべて補助金でま

かなうのである[スチュアート 1993:133]。

ヌナブト政府も、自立経済を目指して近代的知識や技術を持つ人材の育成や、豊富な原野を利用した観光産業に力をいれるが、実際のところ、補助金なしではやっていけない。こういった政策が将来成功するにせよ、しばらくの間は英語を基盤とするマジョリティ社会からの経済援助に頼らざるを得ず、今すぐイヌイット語使用の経済活動を主張したところで、英語の重要性は消えない。そこで、バイリンガルとしてのイヌイット教育がさらに求められ、社会的にイヌイット語が活躍する場はなかなか増えないのである。実際に、仕事場で英語を使うことに抵抗感を覚えることはなく、英語はあくまでも現金収入やより広い世界へのアクセス方法と割り切るイヌイットも多い。

よって、近代的経済活動においては、英語習得が不可欠であり、イヌイット語は社会的価値を減少させている。しかし、仕事を求めて、ヌナブト準州におけるイヌイット語の経済的活用を望むヌナブト住民が存在することは事実であり、準州政府機関や教育機関では、イヌイット語の知識が雇用につながる場合もあると考えている。ただしその場合でも、上記の社会的要因により、英語とイヌイット語の両方を習得する方が将来的に有利に働くだらう。

以上より、イヌイットの経済活動には、利用価値が限られるためその影響範囲を狭めるイヌイット語が存在する。その上で人々は、イヌイットのイニシアチブによる経済の実現と、マジョリティ経済社会への参加という現実の間でバランスを取っている。イヌイットによる経済を期待することで、彼らの自己アイデンティティは高まり、実際にマジョリティ経済と接点を持つことで英語の使用頻度も高くなる。よって、イヌイットであること自体は、経済活動においても重要性を持つが、イヌイット語が英語に押しやられる現状は不変だといえる。ここでは、英語とイヌイット語のバイリンガルになることで、「イヌイットらしい」経済活動を展開しようとする自己アイデンティティがあり、イヌイット語は、政治的・文化的意味合いにおいて残されるものの、経済的価値は非常に限られている。

(3)倫理観・世界観

文化と言語の結びつきを前提とすると、社会変化にともなう伝統的倫理観や世界観の変化と言語活動の変化は相互に影響しあい生まれると考えられる。例えば、ヌナブトの言語長官 (the language commissioner) である Eva Aariak は、イヌイット政府が公

式文書をイヌイット語で作成する際、イヌイットの伝統的生活様式と関係のある専門用語であれば何の問題もないが、電子レンジ (microwaves) という単語やオフィス用語など、従来のイヌイット語にはなかった専門用語に問題を抱えると述べる⁽¹⁷⁾。つまり現在のイヌイット語では、現代イヌイット社会で生活する際に、表現にどうしても限りがあり、人々は英語でその部分を補うと考えられる。ここからは、社会変化によってイヌイットの世界観が変化し、イヌイット語の使用のみでは表現することが困難となる現状がみられる。また Eva Aaria は、それらの専門用語を新しくイヌイット語として作り、学校で教えることで対応したいと意欲的である。他方、イヌイット語には「雪(snow)」を表す言葉が 7 つあるといわれるように、英語ではなくイヌイット語のみが持つ言語の幅も存在する。ここから言語変化の二面性を捉えると、言語の象徴化は伝統的倫理観や世界観の価値をイヌイットの意識内で高めるが、言語の使用範囲の縮小化はその高めた価値が社会的には反映されないことを表すのではないだろうか。

2. 国民的アイデンティティの保持

以上で抽出した民族的アイデンティティと国民的アイデンティティの関係性にも触れておきたい。大村は、イヌイット社会が近代国家に取り込まれる過程で、国家に従属するという負の側面だけでなく、近代技術や知識などの恩恵にあずかった側面を指摘する[大村 2003:199-200]。またスチュアートは、イヌイットがこれら 2 つの側面を非常に巧みに調整しているという。例えば自治領記念日にあたるカナダ・デーでは、国旗を掲げながら村で盛大なパレードを行ない、その後食べ物を持ちよるピクニックになるという[スチュアート 2002:118-119]。

「カナダ人」であるというアイデンティティは、イヌイットが民族運動を展開する過程でもはぐくまれた。例えば、1970 年代に、憲法改正の動きにあわせて活発化した先住民組織の活動は、連邦政府の財政援助 (コア・プログラム) によって支えられた。その費用をもとに先住民組織は国内外へむけ、派手な政治活動を展開した。カナダ政府の中には、財政援助打ち切りを主張する強硬意見もあったが、コア・プログラムは継続された[加藤 1990:140-141]。その結果、「1982 年カナダ憲法」の中に先住民の権利が盛り込まれた。加藤はこのような民族問題は、世界各地の例でみると、政府当局によって拒否や無視されることが普通であり、カナダの先住民は有利な状況であったと指摘する[加藤 1990:139]。つまり多文化主義であるカナダの許容がなければ、イヌイッ

トを含む先住民の運動も成果をあげることはなかったのである。一般に、近代国家の枠組みの中では、マイノリティが独自性を保つことは困難とされる。イヌイトが勝ち取ってきた権利も、イヌイトの努力がかかせなかった。しかしながら、カナダのマジョリティ社会は、他国では認められないほどの理解を先住民に示してきたこともまた事実である[スチュアート 1993:116]。その中でイヌイトは、「保護される対象」ではなく、カナダ社会の先住民族として、社会に参加すべきであると考えている。つまりイヌイトとしてのアイデンティティとともに、「カナダの先住民族・イヌイト」というアイデンティティも芽生えたのである。

これらから、国民的アイデンティティも、イヌイトの自己アイデンティティの一部を占め、民族的アイデンティティと共存するといえる。

3. まとめ

これら自己アイデンティティの特性からイヌイト語の2面性を捉えると、民族の独自性を保ちつつも、マジョリティ社会へ参加しようとするイヌイトの姿勢が浮かんでくる。同化政策や定住化政策に対抗しようとする民族運動は、それまでの拡大親族集団の域を超えた民族的アイデンティティを、イヌイトに持たせた。そういった環境変化に自分たち独自のやり方を用いて適応した結果、イヌイト語の保持を求める動きをみせると同時に、英語文化の進出も受容するという2面性を生んだ。つまり、ここでいう2面性とは、変化に巻き込まれまいとするイヌイトと新たな変化に適応しながら巻き込まれようとするイヌイトの現実の姿を表す。このことから、近代国家の枠組みに組み込まれた形で、そこから独自の道をさぐるイヌイト像が浮き上がるのである。さらに、連邦政府の2言語・多文化主義政策からイヌイト語をみると、独自の言語や文化を保持することは認められても、実際に独自の言語活動を活発化しにくいマジョリティ社会が映し出され、このことが、イヌイト語の使用範囲を狭め、言語のシンボル化に傾倒する要因となるのである。

終章 イヌイットである意義とは

ここであらためて問題意識を振り返ってみると、イヌイット語はイヌイット社会において文化の核とみなされ、その自己アイデンティティを象徴するものであるといえる。また、言語活動の変化例から、イヌイット語も「再生産」されるものであると捉えられる。さらに、イヌイット語が現在持つ2面性から、イヌイットの自己アイデンティティを内外に確立する根拠として、または支える要因として言語があると考えられる。つまりイヌイットは、内容や質を変化させながら文化の「再生産」を行うことで、彼らの文化を持続・維持させ、独自の自己アイデンティティを保っているのである。事実、言語の保持という視点で見ると、他の国家におけるマイノリティ集団に比べ、比較的言語の力を保っている[Dorais and Sammons 2000:108]。ただしそれは、スチュアートや岸上が指摘するように、多様な文化の共存を許容するカナダというマジョリティ社会からの理解や、自らの民族文化に対する重要性と危機感の認識などの諸条件がなければ成り立たないことである[スチュアート 1993:116 : 岸上 2004:23]。

では、ヌナブト準州のイヌイットにとって、「イヌイットである」と意識することは何を意味するのであろうか。

同化政策以降、近代国家の中で彼らは決して恵まれた環境にはいなかった。同化政策は、イヌイットから政治的・経済的イニシアチブを奪い、社会的なイニシアチブを減少させた。これにより、民族としてのあり方にも大きな影響を受け、「近代化」のもと伝統的な価値観や文化が減少した。その一方で、岸上は政治の場でアイデンティティが強化され、カナダ国内や国外へと益々その範囲を広めつつあることを指摘する。

生活様式のカナダ的な画一化やグローバル化が進行しつつあるなかで、イヌイットを文化的に象徴する弁別的要素（言語や儀礼など）は減少していく一方で、イヌイット意識は、カナダの先住民意識とともに強くなりつつあるといえる[岸上 1998:221]。

事実、「イヌイットである」という語りには、彼らの民族性を意識し、独自の活動を展開したいという本来の意味から、独自の活動を伴う機会を失い、その結果彼らの

く間に失ってしまうものなのである。その点で文化的重要性が外部社会から高い評価をうけて発展したイヌイト彫刻のようにはいかない。

また民族運動の中心を担ってきた土地請求や自治政府などの要求がある程度実を結んだ現在、イヌイト語を共有するという事実が、民族運動以前に存在しなかった「イヌイト」という自己アイデンティティを保つ役割は大きい。

以上より、ヌナブト準州イヌイトにとってイヌイト語をシンボルとして「イヌイトである」と意識し、主張することは、内では「我々イヌイト」という連帯感を生むことにつながり、外では「先住民イヌイト」というラベルとなって近代国家の中で独自性を保つことができるといえる。

したがって、「イヌイトである」と語ることは、本来の内容が薄れてしまってもなお、イヌイトとしての独自性を保つ上で極めて重要なはたらきをしているといえる。そしてイヌイト語はその語りの根拠として彼らの自己アイデンティティを支え、強化する役割を担う。またその中でみられるイヌイト語の2面性は、近代国家に組み込まれる過程で、「イヌイト」を生き残らせるために使われてきた巧妙な手段として捉えられるのである。

謝辞

本論文の執筆にあたり、まず担当教官である関根久雄先生に御礼申し上げたい。本論文の構想や草稿を、方向性が全くまとまっていない初期の段階から相談にのっていただき、非常に熱心なご指導をいただいた。また、本論文の構想について、言語学の視点からアドバイスをしてくださった井出里咲子先生にも御礼申し上げたい。またゼミの皆さんからは、本論文の構想発表や中間発表の際にコメントや質問、ご批判をいただき、大変感謝している。さらにイヌイット研究の第一人者であるスチュアートヘンリ先生にも感謝の意を表したい。ご多忙の中、ご自身の参考資料のリストの一部を快くご提供いただいた。皆さまからのアドバイスは大変参考になり、本論文に多大な貢献をしていただいたと感じている。そのほか、本論文の執筆期間中、ご支援いただいた周囲の方々にも、この場をかりて御礼申し上げたい。執筆に時間を費やした結果、ご迷惑をおかけする機会も多々あったと思われるが、皆さまには温かく見守っていただき、大変感謝している。

注

(1)イヌイットがいつ、どこで独自の民族形成を行ったのかはいまだに解明されていないが、約6万年前から1万年前の最後の氷河期にシベリアとアラスカが陸続きになった際、アメリカ大陸に何回も繰り返して渡り、少なくともこの期間のころには極北の地で独自の社会を形成していた、と考えられている[パーチ 1991:3-7; 岸上 1998:18]。

(2)一部の研究者によれば、イヌイットという日本語表記は正確な発音を表しておらず、イヌイトがもっとも近い日本語表記になる。しかしながら、イヌイットという呼び名が現在日本で幅広く使用されているため、イヌイトは本論文では使用しない[スチュアート 2002:108-112]。

(3)イヌイット、ユピックはそれぞれの土地の言葉で「人間」を意味する。

(4)スチュアートはさらに民族について、「起源を同じくして、言語、文化、宗教、政治、経済、社会組織を共有し、歴史的な運命をともにする集団」と定義している[スチュアート 2002:116-117]。

(5)1970年、カナダ北部での毛皮交易を目的に、当時の英国王チャールズ2世の庇護を受け創立された。またミラーは、毛皮交易に関して、欧米交易会社が毛皮交易によって利潤を得たとともに、先住民も鉄製品など、文明品の恩恵をうけたため、毛皮交易は欧米人と先住民との協力関係の産物であったと指摘する[ミラー1993:237-240]。

(6)ここでのパターンリズムとは『子供に対する父親のような、権威主義的温情主義。この場合、政府が先住民を「子供」扱いして、「先住民のため」という口実でおこなった隔離・同化政策』[吉田 1998:301]という吉田の定義を前提とする。

(7)加藤は、カナダにおけるマジョリティは、一般的にはイギリス系カナダ人であるとする。彼らによってカナダ社会が、イギリス色の強い政治や文化とともに築かれたからである[加藤 1990:58]。イギリス系カナダ人に対しては、第2のマジョリティであるフランス系カナダ人や、先住民、移民や難民などがすべてマイノリティとして位置づけられる。ここでは、イヌイットのみをマイノリティとみなした視点に立ち、イギリス系カナダ人を中心とするカナダ社会全体を、マジョリティ社会とする。またマジョリティ社会は、イヌイットの生活をコントロールする影響力を持つ。

(8)下村によると、「IQとは、イヌイットの価値、世界観、言語、社会的組織、知識、

ライフスキルなどの伝統的な文化のすべての側面を包含するイヌイットの文化を相対的に表したものである」[下村 2003:243-4]。

(9)Nunatsiaq News のウェブサイト

(http://www.nunatsiaq.com/news/nunavut/411119_02.html)より (04/11/24 参照)。

(10)民族学および考古学調査計画「ペリーベイ調査計画」に参加した大村敬一氏によって調査・確認が行われた。

(11)この方言は、エスキモー・アリュート語族に属するイヌクティウト(Inuktitut)のネツリック (Netsilik) 方言で、ネツリック方言の3つの下位方言 (Netsilik, Utkuhikhalik, Arviliguak) の中の一つ、アグビリグユアク (Arviliguak) 方言である。また、この方言を使うイヌイットはイヌイット内における民族集団としてはアグビリグユアグミウト(Arviliguarmiut)であり、ペリー湾のイヌイット名も、Arviliguak である[大村 1994:106]。

(12)文献では「双数」とされるが、同文献において双数の場合は inu-ik で複数が inu-it であると明記する箇所があり、ここでは大村氏が論じておられる理論と一致する「複数」を採用した[大村 1994:111]。

(13)文献では「複数」とされるが、同文献で明記される表によると、複数の場合は-vugut で、双数が-vuguk となるので、ここでは大村氏が論じておられる理論と一致する「双数」を採用した[大村 1994:110]。

(14)イカルイトにある大学で、受講生はすべてイヌイット。大学の目標は主に、就職機会を持つための技術教育である[浅井 2004:246-247]。

(15) イヌイット語保持に賛成しなかった中年世代のこの1人は、南カナダに長い年月住み、イヌイット語は英語に取って代わられるべきだ、と感じている[Dorais&Sammons 2000:107]。

(16)遺産言語とは、カナダでは英語とフランス語以外のマイノリティグループの言語を指す[長谷川 2002:182]。カナダ政府は、国内のマイノリティ言語をカナダの文化的遺産として前向きに捉え、教育によってカナダのマイノリティ集団が言語を保持する援助を行った。

(17)Nunatsiaq News のウェブサイト

(http://www.nunatsiaq.com/archives/nunavut021011/news/nunavut/21011_08.html) より (04/11/24 参照)。

参考文献

Arch, M and Smith,S.

- 1992 Consociation revisited: Nunavut, Denendeh and Canadian constitutional consciousness. *Etudes/Inuit/Studies* 16(1-2) 97-114.

Arnatsiaq, V.

- 2002 Teaching Inuktitut in school: Our experience at the Attaguttaaluk elementary school in Igloolik, Nunavut. *Etudes/Inuit/Studies* 26(1) 181-182.

浅井晃

- 2004 『カナダ先住民の世界－インディアン・イヌイト・メティスを知る』彩流社。

バーチ、E.S.Jr.

- 1991 『図説エスキモーの民族誌－極北に生きる人びとの歴史・生活・文化』スチュアート・ヘンリ訳、原書房。(Ernest S. Burch Jr.,1988,*The Eskimos*. University of Oklahoma Press.)

Crowe, K.J.

- 1974 *A History of the Original Peoples of Northern Canada*. Kingston and Motreal: McGill-Queen's University Press.

ダニエル・ネトル and スザンヌ・ロメイン

- 2001 『消えゆく言語たち－失われることば,失われる世界』島村宣男訳、新曜社。(Daniel Nettle and Suzanne Romaine,2000,*Vanishing Voices: The Extinction of the World's Languages* .Oxford University Press.)

Dorais, L.J. and S.Sammons

- 2000 Discourse and Identity in the Baffin Region. *Arctic Anthoropology* 37(2):92-110.

長谷川瑞穂

- 2002 「カナダの多言語主義の政策と言語教育」河原俊昭編『世界の言語政策－多言語社会と日本－』pp.161-188、くろしお出版。

原ひろ子

- 1979 『極北のインディアン』玉川大学出版部。

井上治子

- 2001 「情報化とアイデンティティー—個人化の潜在力」津田幸男・関根久雄編『グローバル・コミュニケーション論—対立から対話へ』pp.221-235、ナカニシヤ出版。

J・R・ミラー

- 1993 「北部と先住民」D・フランシス・木村和男編『カナダの地域と民族—歴史的アプローチ』pp.223-255、同文館。

加藤普章

- 1990 『多元国家カナダの実験—連邦主義・先住民・憲法改正—』未来社。

岸上伸啓

- 1993 「カナダ・イヌイット」信濃毎日新聞社編『世界の民—光と影 下』pp.223-231、明石書店。
- 1996 「カナダ極北地域における社会変化の特質について」スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp.13-52、言叢社。
- 1998 『極北の民 カナダ・イヌイット』弘文堂。

木村和男

- 1997 「多文化主義宣言への道—連邦結成後の移民政策を中心に」西川長夫・渡辺公三・ガバン・マコーマック編『多文化主義・多言語主義の現在—カナダ・オーストラリア・そして日本』pp.55-74、人文書院。

宮岡伯人

- 1978 『エスキモーの言語と文化』弘文堂。
- 1982 「エスキモーと言語汚染」『言語』11(3): 329-344。
- 1996 「消滅の危機に瀕した言語を追って」『言語』25(6): 20-26。
- 2002 「消滅の危機に瀕した言語—崩れゆく言語と文化のエコシステム」宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語—ことばと文化の多様性を守るために』pp.8-53、明石書店。

中野秀一郎

- 1999 『エスニシティと現代国家—連邦国家カナダの実験』有斐閣。

大村敬一

- 1994 「消えた双数は何を意味しているのか?—カナダ・イヌイットの言語の変化

とその社会・文化背景」『早稲田大学大学院文学研究紀要：哲学・史学編』
pp.105-116。

1996 「「再生産」と「変化」の蝶番としての芸術－社会・文化変化の中で芸術が果たす役割」スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp.85-124、言叢社。

2003 「野生の思考の可能性－イヌイトの他者表象にみるプリコラージュの秩序」スチュアート・ヘンリ編『「野生」の誕生－未開イメージの歴史』世界思想社。

Patterson, P.

1982 *Inuit Peoples of Canada*. Toronto : Grolier Limited.

Rasmussen, K.

1976 *The Netsilik Eskimos: Social Life and Spiritual Culture*. New York : AMS.
(reprinted from the edition of 1931, Copenhagen.)

Shearwood, P.

2001 Inuit Identity and Literacy in a Nunavut Community. *Etudes/Inuit/Studies* 25(1-2):pp.295-308.

下村智子

2000 「カナダ先住民の教育政策に関する研究－先住民政策に関する議論の変遷を中心として」『教育学研究紀要』46(1): 540-544。

2001 「カナダにおけるイヌイトの教育政策の変遷」『教育学研究科紀要』50:175-183。

2003 「ヌナブト準州における教育権限」小林順子・関口礼子・浪田克之介・小川洋・溝上智恵子編
『21世紀にはばたくカナダの教育（カナダの教育2）』pp.242-246、東信堂。

スティーブン・A・ワーム

2002 「言語の危機と言語の死－危機言語を保持し、再活性化するには」宮岡伯人・崎山理編『消滅の危機に瀕した世界の言語－ことばと文化の多様性を守るために』pp.146-168、明石書店。

スチュアート ヘンリ

1993 「現代を生きる先住民族－ヌナブト協定締結とカナダ・イヌイトの今後」

『公明』 384 : pp.104-117。

- 1996 「現在の採集狩猟民にとっての生業活動の意義－民族と民族学者の自己提示
言説をめぐって」スチュアート・ヘンリ編『採集狩猟民の現在』pp.125-154、
言叢社。
- 1998 「先住民が成立する条件－理念から現実への軌跡」清水昭俊編『周辺民族の
現在』 pp.235-263、世界思想社。
- 1999 「イヌイト語の現在と未来－民族語温存と「近代化」のはざままで」『ことばと
社会』 2: 123-136。
- 2002 『民族幻想論－あいまいな民族つくられた人種』解放出版社。

Utatnaq, A.

- 1988 Reflections on Language Change in Iqaluit. *Etudes/Inuit/Studies* 12(1-2): 245-247.

Williamson, R.G.

- 1974 *Eskimo Underground: Socio-Cultural Change in the Canadian Central Arctic.*
Sweden : Uppsala.

吉田健正

- 1998 『カナダ 20世紀の歩み』彩流社。

INUIT IDENTITY AND LANGUAGE BEHAVIOR IN NUNAVUT TERRITORY, CANADA

Inuit, aboriginal people in the Northern Canada, have experienced the rapid change in their communities since 1950s when they were encouraged to assimilate with the Canadian majority. Though almost of the people under age 50 are bilingual speakers in Nunavut, they have the strong identity in their own languages, Inuktitute and Inuinnaqtun. This paper seeks to understand how language behavior may be understood as an expression of Inuit identity in the present society. In the Introduction and the Chapter I, it describes the meaning of this paper from the view of linguistic studies, especially focused on the minority languages.

In the Chapter II, it focuses on the social transition in the Inuit communities and tries to demonstrate how the value of Inuit culture including languages changed under the Canadian government in the last 50 years. During the time, the identity of 'Inuit' has been created and Inuit people began to exclaim the importance of their own culture.

In the Chapter III, using the several language case studies, it describes how Inuit language behavior may be connected to Inuit identity. It reveals that Inuktitute and Inuinnaqtun culturally and politically predominate over the communities, on one hand, and English economically and socially predominate on the other hand. In the Chapter IV and Concluding Chapter, it examines how present 'Inuit' is identified from these two characteristics in Inuit language behavior. It relates to *Multiculturalism within a Bilingual Framework*, the Canadian government policy since 1970s, which is still emphasized by the present Canadian government.

In Conclusion, people in Nunavut has created 'Inuit' identity thorough the process of gaining self-determination in Canada. In this stream, their languages have become the symbol of Inuit culture.